
少年よ、 を抱け ～風木和真の場合～

仮名文

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年よ、 を抱け ～風木和真の場合～

【Nコード】

N 8 6 3 8 Q

【作者名】

仮名文

【あらすじ】

風木和真・十七歳。周りに紹介できるくらい女に縁がある反面、近すぎるその距離により女難の日々を余儀なくされてきた彼は、何の前触れもなしに異世界へと召喚されてしまう。そこで早速語られる召喚理由は、世界征服を企む魔王退治でも、迷宮に隠された秘宝探しでもなく は？ 子作り支援？！ 即行拒否つても帰れない、帰るためには更なる苦難を乗り越えなくてはならない和真は、苦手意識を（半ば強制的に）克服するべく、今日も今日とて美少女たちに囲われる。嫌いではない、苦手なだけだ！ と青白い顔で豪語す

る和真の行く末は果たして。話の進行上、ハーレムとエロと下ネタに走る予定です。苦手な方は未読をおすすめします。また、主人公がガツガツしておりませんので、その手の期待にも応えられません。予めご了承ください。

夢を夢見る少年

その日、一人の少年が、”異世界”なる場所から召喚された。黒髪黒目、容姿は端麗でもなく平凡、もつと言えば貧相、そして童顔。

辛うじて少年を、この世界で通用する男としていたのは、それでもギリギリラインの身長だけ。

だからこそ、彼を一目見た者は全員が落胆した。

召喚した責任者が言うには十七らしいが、それにしたってこんな子どもが、果たして自分たちの益になるものか。

が、何の前触れもなく、知らん土地に召喚された少年にとっては、益以前の問題である。

というか、彼はまず、召喚された先が異世界、というこの現実を否定した。

でもって、彼は兎に角、これは夢である、という主張で自分を納得させた。

でなければ、半狂乱に陥っていただろうから。

何せ彼は、つい先程まで友人らとゲーセンで遊んでいた真っ最中。

それがいきなり、厳つい銀の鎧を纏ったむさ苦しいコスプレ野郎と、明らかに外国人風の老人が数人、黒だか白だか判らん魔術めいた怪しい服を着て、自分を取り囲んでいるのだ。

直前まで格ゲーに勤しみ、座っていたがために、したたかに尻を打つ羽目となった自分を、得体の知れない変質者集団が上から見下ろしてくる図。

周りを見渡しても石造りの部屋が広がるばかり、あれだけ大音量で鳴り響いていたゲーセンの音も一切がかき消されていたなら、本

当にもう、どうして良いのか判らなくなるってもんだろ。

代わりとばかりに、ぺちゃくちや唾液混じりの音が至る所で聞こえてくれば、それが彼らの言葉と理解するまでに数分かかり、その数分で少年は、これは夢だ、と半ば強引に自分を納得させたのだ。何よりも自分自身（主に精神面）を守るために。

そうこうしている内に、厳ついコスプレ野郎で両脇をがっちり固められてしまった少年は、魂を半分、空想のお花畑に飛ばしながら、ある広間まで連行されていく。

とんと背中を押され、ふらふら歩けば、目の前にはこれまた外国人な、王様コスの渋いオッサンが、絶妙な距離感と高さのある場所で、立派な椅子に座っている姿があった。

しかもこのオッサン、なんだか威厳っぽいものまで感じられて仕方がない。

常日頃、母親に喰われ気味の父親を見てきた少年は、そんな男らしい姿に「おお……」と意味もなく声を上げると、なんとなく正座してみせた。

オッサンは少年の行動に、なにやら感嘆詞っぽい声を上げると、満足げに笑って言葉を発した。

それはそれは、見た目通りのイイ声で。

「えるまねるももたん、によるにゅ」

それはそれは、オッサンの全てに似つかわしくない、気の抜ける言語で。

「……………」

破壊力は、抜群だった。

「えるまねるもも、にゃにゃうにらん？」
「……………」

再び、理解不能、というか理解をあまりしたくない言語が、男の目から見ても格好良いと思えるオッサンからやって来た。

あごひげを擦る姿は、かなり様になっているというのに、疑問符をつけたことによって、より一層、頭が沸きそうな感じに仕上がっている言葉の響き。

どうにも我慢できず、少年が助けを求めるように辺りを見渡せば、王様コスのオッサンの横、今になって気づいた、こちらを胡乱げに眺めている美少女が、翳した扇越しに何事か言う。

「るれいろな、りりやれめむらわ、へそ」

(……へそ?)

聞いたことのある音に合わせ、少年の視線が学ランの上から自身の腹に向けられる。

するといきなり周りがざわめき、何だ何だと顔を上げれば、怪しい魔術師装束の老人が、酷く慌てた様子で近づいて来た。

凶器となりそうな、棍棒紛いの木の杖を持って。

思わず仰け反れば、思い切り振り被られるソレ。

(殴られる!)

そう思った瞬間、少年の脳裏に浮かんだのは、辞世の句でもなければ、今生との別れの予感でもない。

(つて、何で他の屈強そうな奴じゃなくて、こんなヒョロいジジイに黙って殴られなきゃならねんだよ!)

今までは夢だからと成り行きに任せてきたものの、そこだけは譲れなかった少年。

杖が振り下ろされるのとはほぼ同時に、ジジイに向かい、正座で少し痺れ気味の蹴りを繰り出せば、枯れ木のような腹に命中する。

直前、ピタツと止まった杖からチカチカした光が降り注いだのを、遅れて認識した少年は、杖は殴るためではなかったと、蹴った後で

知った。

と同時に、いきなり耳に入ってくる、聞き慣れた言葉の数々。

「長あつ！ 長が、長が春告しゅんこくの姫に！！」

「ご乱心、ご乱心！ 姫がご乱心なされた！！」

「おお、この国はもう終わりじゃ！！」

「世界の破滅は、すぐそこまで来ているというのか！」

「くっ、長！ 貴方の跡は私が必ずっ！！」

「し、死んどらんわ、愚か者どもっ……！ それ以前に、何故、誰もワシに手を貸さんっ……！？」

わーわー騒ぐ周囲に対し、少年に蹴られたジジイこと長が、痛みを掠れた声を上げた。

しかし、元々ない声量は騒ぎに掻き消され、聞いてしまった少年は罪悪感交じりに、長へ手を差し伸べた。

「お、おお、申し訳ございませぬ、春告の姫」

すると長、蹴り上げた少年に礼を述べて手を取ると、恭しく頭を下げてきた。

何なんだと訝しく思えば、煩かった周りが、しん……と静まり返っていることに気づく。

改めて辺りを見渡した少年は、もう一度、何なんだと怪訝な顔をした。

長が頭を下げた途端、広間にいる全員が全員、膝をついて頭を下げてきたのである。

先程は高みから椅子に座って出迎えたオッサンも、席を立てて他同様、頭を下げていた。

唯一頭を下げていないのは、扇で顔を半分隠したままの美少女のみ。

まるで、オカルト集団からご神体扱いされているような現状に少年は慄き、答えを求めるように、態度の変わらない美少女を見やれば、何故か睨まれた。

自分とそう、齢の変わらなさそうな少女とはいえ、まずお目に掛かれない類の美少女の眼力は、少年を更に怯ませる。

と、これに気づいたオッサンが、美少女を見咎めと、そのまま地響きになりそうな声で言った。

「ライシオーネ。一介の巫^ふが、長の認めた姫を前にして面を上げたままとは何事か」

（……ああ、なるほど。さっきの光は、俺がコイツらの言葉を理解するための）

それまでのふにやふにやした言語とは違い、オッサンの見た目をなぞる、威厳溢れる言葉を聞いた少年は、ようやく杖から出てきた光の正体を知った。

全ての事柄において、一步遅れを取る少年だが、これはただ単に目の前で起こっている事象を、夢で片付けているせいであり、決して彼の理解が遅いわけではない。

かといって、そんな少年の、表に出ない混乱をライシオーネと呼ばれた美少女が判るはずもなく。

「ふんっ」

それだけ残して、広間の奥、椅子の後ろへとライシオーネが引っ込んでいったなら、「ライシオーネ！」と寤めたオッサンが、立ち上がりかけた身体を、慌てた様子で再度、少年へ向けて膝を折ってきた。

どうやら、娘らしきライシオーネを追うよりも、少年への義理立てのほうが優先されるらしい。

悪い気はしないが、居心地はすこぶる悪い。

広間を出る際、こちらを凄^{こわ}い目で睨んできたライシオーネを見て

しまったなら、尚更であつた。

（つつつても、夢だろ、コレ。いい加減、目覚めてくれねえかな、俺）

ライシオーネに、またしても怯えてしまった自分を誤魔化すように、少年はそんな事を思いつつ頭を掻く。

と、一定の距離を保って近づいてきた長が、頭を下げたまま言ってきた。

「春告の姫……重ねて申し訳ございませぬが、これは現実でございます」

「……は？ 何言つてんだ、じーさん？」

まるで心を読んだかのようなタイミング。

ついつい素で聞けば、じーさんと呼ばれた長は、更に頭を低くして言う。

「姫の御言葉、確かに御尤もではございます。ございしますが……どうか、諦めて下され。姫は我らが希望。ゆえにこの地へお招きしたのです」

そんなこんなで長は、未だ眼前に広がる全てを夢で片付けようとする少年に、彼を召喚した旨と、そうしなければならなかった理由を、かなり端折って説明してきた。

続き、この世界において、召喚までした少年に頼みたい事を告げる長。

対し、少年の答えたるや。

「これは、夢なんだあああああああああああああああああああああああつつ！！」

制止を叫ぶ声を避け、入ってきた扉を蹴破った少年は、今し方聞いた事を掻き消すように耳を塞ぎながら、長い廊下を駆け抜けてい

つ
た。

夢を夢見る少年（後書き）

初めまして、仮名文と申します。

少年主人公の長編を今回初めて投稿してみました。
のんびり進めていく予定です。

書くまでもありませんが、のっけから殻に閉じこもってしまった彼が、今作の主人公。

少しでも楽しんで貰えたら嬉しいです。

逃避したい現実

これは遡ること数日前、日頃から女にガツガツしている友人の一人が、ふうき かずま風木和真へ振ってきた会話の一端である。

「あー、どつかにイイ女いねえかなあ？　なあ、和真くん」

「……何でイの一番で俺に振るんだよ」

四、五人からなる友人の内、一番色んな意味で軽そうな少年が、和真の肩を叩いてきた。

不気味なほど白い歯を輝かせた少年は、すげなく払われた手を上げると、大げさに肩を竦めて表情を暗くする。

「そりゃあ勿論、決まってるだろ？　こんなかでフリーの女に縁があんの、お前だけじゃん。アイツとアイツはまだまだ遊ぶ気のないお子ちゃま、あの野郎は天下の幼馴染様がいらっしやる」

「天下の幼馴染……ああ、あの」

「そう、あの。昨日も夜這いされたらしいぜ？　くうっ！　羨ましい！」

「そおかー？　同い年で魔女コス、しかもマント下は全裸の女なんて、丸つきり変態じゃねえか。俺は奴に同情するね」

「何を言う！　あんな可愛い子、滅多にいないってのに！」

「可愛ければ、多少　いや、かなりのイタさは目を瞑んのか？」

「応！」

「……俺はパスだな」

話題の映画を暇つぶしに見に来たはずなのだが、気づけば少年が

指差した三人と、距離が開いていた和真。

これさえ詰めたなら、この鬱陶しい奴も諦める、そう思ったのも束の間。

早足を仕掛ける直前で再度ガツと肩を掴まれては、少年の鬼気迫る血走った眼にかち合い、喉の奥が引き攣るのを感じた。

「かーずまくん？ 話を逸らすなよ。俺は他の誰でもないお前に言っただ。女紹介してくれって。姉と妹、幼馴染にいとこの若奥さん……ほおら、近場だけでもこんなに」

「いや、若奥さんって。いきなりフリーじゃねえし。人妻は駄目だろ、人妻は」

「いやいや、俺的には全然問題ない」

「お前に問題があるからな」

「そうそう……って、何言わせんだよう！」

振り被られる手。

やり過ぎしても少年の追及は止まず、「で？」と期待に満ちた視線を送ってくる。

溜息をついた和真は、前に行く三人に目をやると、仕方ないと言った調子で少年を見ずに言った。

「紹介……してやつてもいいが」

「おお！」

「ただし！ 俺の話を聞いてからでも、して欲しいんだったら、だけどな」

「おお……？」

言いたい事が判らないのだろう、目を丸くさせた少年に、和真はもう一度溜息をつくとおもむろに口を開いた。

少しだけ、遠い目を空に流しながら。

「とりあえず、お前が言った四人だが」
「うんうん」

「俺が一番オススメしない四人組みだ」

「うん　うん？」

「何でかってえと、まずは俺の姉、明美^{あけみ}。お前も会ったことがあるから判るだろうが、アイツはあの通り、外では理知的な才女を気取っている。が、休日の過ごし方は世間一般が認めるような女じゃない。下着姿で平気でうろつくわ、目の前でケツは搔くわ屁はこくわはつきり言っちゃまうと性別間違った中年オヤジだ。アイツと比べたら、親父なんか乙女に分類されちまう」

「親父より中年オヤジ……い、いやでも、あのプロポーションで下着姿ってのは」

「じゃあお前、この話はどう思うよ。初めて部屋に連れて来た彼女、イイ雰囲気デキスの一つでもしそうな予感。幸い、家には誰もいない。もしかしたらこのまま先まで、なんて柄にもなく甘酸っぱい気分浸っていたら、うつすら開いていたドア。嫌な予感がして開けてみりゃ、出歯亀宜しく、デジカメ片手に現れる姉。いやー、思ったより早く帰って来れてさ。え、これ？　記念よ記念、貴重でしょう？　弟の筆下ろし」

「何か……悪い」

視界の端で、友人の軽そうな頭が頂垂れた。

これへ「いや」と短く返した和真は、続けて妹の話をしていく。

「次に俺の妹の詩織^{しおり}」

「ああ、詩織ちゃんね。あの子、可愛いよな？　俺らに挨拶するだけでも、顔を赤くして恥しがっちゃってさ。お前の後ろに隠れてお兄ちゃん助けて、みたいな？」

「……その陰で、延々呪詛吐いててもか？」

「は？」

「死ねから始まって、たとえばお前相手なら、軽い頭に羽でも生えて首が千切れちゃえばいいのに、あのピアスに重石をつけたらどれくらいの重量で千切れるかな、うふふ、とか」

「べ、別の人でお願いします」

すっかり顔を青ざめさせた少年に、そうだろうとも、と頷いた和真は、疲れきった表情で薄く笑う。

「で……ああ、幼馴染だったな。幼馴染といえば、明日香あすかか」

「お、おう！ 元気だよなー、アイツ！ 他にも結構狙っている奴がいてさ」

「元気過ぎるのも考えものだぜ？ ちょっと遭う度に、空手部所属のパンチが、男相手だからって手加減抜きで炸裂」

「おふっ」

「あまりの痛みに怒れば逆ギレし、かと思えば泣き出して周囲の同情を誘い、結果、俺一人悪者」

「うわー」

「それでも対策としてどうにか回避を試みたなら、執拗に追ってくる暴力の波。空振りを経て鋭くなった一撃は、普通に喰らうよりも重く苦しく」

「……い、いとは？ 若奥様はどうなんだよ？ 四人の中で唯一結婚しているだろ？」

軽くとも、友人の性癖は至極真つ当らしい。

そこにだけ光を見出した和真は、しかし、ヘタな鉄砲も数打ちや当たると言いたげな振りに、憐憫の目を向けた。

「確かに清香姉ちゃんきよかは、この中じゃ一番まともかもしれない。のほほんとした空気、溢れる母性、穏やかな性格」

「おお。そうだろう、そうだろうとも」

「だがな、ああいうタイプが怒らせると一番怖いんだ。あれはそう、お前みたいなの、いかにも軽薄そうな彼女の旦那が、当然の如く浮気した時だった」

「……どさくさに紛れて、扱い酷いじゃねえか、お前の中の俺」

「清香姉ちゃん、笑ってたなー」

「ナチュラルに無視か。……ん？ 笑ってたって？」

「ああ。笑って 旦那に色んなモン盛ってた」

「い、色んなモン？」

「そう。口に出せない色んなモンを。時には男として致命的になる薬なんかも、ちょちよいのちょいと」

「それって犯罪」

「知ってるかー？ 犯罪って、バレなきゃ犯罪にならないらしいぜ？ 清香姉ちゃんがそう言っていた……。そして旦那は自信を失くし、大人しくなったそうな」

「……………」

これにてお開き、と言わんばかりの節で締めくくれば、絶句した少年が頂垂れた。

この様子に心の中で（勝った）と虚しく思った和真。

するとぽんと叩かれた肩。

見やれば憐れむ目に迎えられてしまう。

「和真……お前、女運悪過ぎ」

「……ほっとけ」

軽く受け流しはしたものの、自覚している分、友人の言葉は和真の心にぐっさり突き刺さった。

女運が悪い、女難が続いている そんなの百も承知だ。

それでも和真は生まれてこの方、そういう女に囲まれて育ってきたのだ。

友人のように、女に夢見る、なんてことは在り得ない人生だった。

ちなみに。

そんな人生を語るくせに、彼が進んで彼女を作ったのは、偏に思春期特有の焦りからであった。

または日本人特有の、周りから置いてゆかれる状況への恐怖から、

女を知らなければいけないと思ったのである。

そうして付き合い始めたのは、軽そうな友人をまんま女にしたような少女。

和真が半ば投げやり「彼女欲しー」と青春していた時に、「遊んであげよっか？」と挑発的なことをのたまってきたのが切欠だった。

だというのに、姉の出歯亀に顔を赤くした彼女は、自分が処女だということを暴露していた。

勿論その後は、こちらも被害者なのに、ビンタを喰らって、はい、さよなら。

元凶の姉はここぞとばかりにそのシーンを撮り、”弟の初失恋”という映像ファイルを作ったとか、作っていないとか。

嗚呼、人生って、どうしてこうも、ままならないんだろう。

走馬灯のように、今までの女難の数々を巡らせていった少年・和真は、脱走から程なく捕まった身体を引き摺られつつ、長と呼ばれていた老人の言葉にぽつりと零した。

「だってえのに、何で俺？ 結局、キスすらして来なかったっていうのに……」

（夢ならとつと、マジで醒めてくれよ）

ほとんど懇願に近い形で空を仰いだ和真は、見慣れない白い天井に向かい、弱々しい声で吠える。

召喚された自分、その理由を。

「世界を救うために四人の女と交われとか、どこのエロゲーだ！
難易度高過ぎだろ……」

せめてこれが、あの友人だったら丸く納まっていただろうに。
そう思うと和真は、選ばれなかった自身の友人に対し、言いがか
りに等しい殺意を覚えるのであった。

異世界からの無茶振り その1

全てを夢で片付けようとする和真に対し、逃げ出した彼を捕らえさせた長は、白く長い眉毛をハの字に曲げて困ってみせた。

「いやはや。どうしたものでしょうか」

（それはこっちの台詞だっ）

のん気とも取れる長の発言に、和真は目を吊り上げて反論を試みるものの、轡を噛まされていては、声を発したところで意味をなさない。

しかも、縄で椅子にグルグル巻きにされているのだ。

暴れたところで疲れるだけ、という状況だった。

仕方なしに和真は長を睨むだけに留めると、せめて轡だけでも外せと、口をもごもごさせた。

逃走防止のために縄を打たれるのは、腹立たしくとも、理解できる。

だが、声まで封じる必要はないはずだ。

色々つつこみたい、増して怒鳴り散らしたい気持ちはあるものの、ここまでされる筋合いはない。

そんな意味合いを気配にまで漲らせたなら、逡巡数秒、長がちらっと和真の斜め後ろで控える甲冑を見た。

一つ頷いた甲冑は、手甲を嵌めたままで、器用に轡を外していく。

「ぶはっ」

完全に取れたところで、これ見よがしに大きく息をついた和真は、改めて長を睨みつけた。

「……で？」

普段の自分ならば絶対にやらない尊大な態度でそう言えば、小さく溜息をついた長がゆっくりと首を振った。

「春告の姫よ、どうぞお怒りをお鎮め下され。姫のお立場も考えず、強引に招いた非、忘れてはおりませぬ。しかし、どうしても我らに

は姫が必要で」

「御託はいい。んな事より説明しろ。百歩譲ってここが夢ではなく異世界だとしても、だ。何で四人の女と交わるのが、世界のためになんだよ？　つーか、何でその条件で俺が選ばれた？　しかも姫って何だよ？」

未だ夢だろと思う心のまま和真がそう問えば、「夢ではないのですがなあ」とぼやき混じりに、長は答え始めた。

和真が召喚されたこの地を、リジェレイシカという。

リジェレイシカは何層かで構成される世界の内、主に人間が暮らしている層を指す。

で、遠い昔、このリジェレイシカで幅を利かせていた人間の王が、増長した人間によくある事をしたそう。

つまりは、他の層への侵略である。

そして当然の如く、負けた。

層が一つ変われば世界観もガラリと変わるのだから、当たり前と言えは当たり前。

しかも、ただ負けたのではなく、とんでもない呪いまで受けるというオチ付で。

戦を吹っつけた相手の、ほとんど気まぐれ染みた呪いの内容は、それはそれは恐ろしいものだった。

末代まで祟るのではなく、末代自体を築けなくする

要するに、極少数を除いて、ほとんどの男が生殖機能を失くす、そんな呪いだっただのである。

まあ、生殖機能がなくなっても、性欲は名残のように存在しているそうだが。

だから最初、リジェレイシカの人間たちは、あまり深刻に考えなかった。

それどころか、簡単に快楽を得られると喜んでいる節さえあったが、時が経つにつれて、そんな悠長なことを言っていられないことに気づく。

まず顕著になってきたのが、女たちの冷ややかな反応だった。

若い内は男たち同様、夫や恋人と無制限に楽しんできた女たち。

しかし、女としての年輪を重ねるにつれて、快楽よりも母性を注ぐ相手を求めた彼女たちは、次第に何の成果も挙げられない男を下すようになっていく。

呪いが男にしか掛けられていないのも、女たちの蔑みに拍車を掛けていった。

呪われる前のリジェレイシカでは、子ができない理由を女だけに求めていたため、余計に男への風当たりは強かった。

かといって、子どもというのは女だけで作れるものでもない。

結果、呪いを免れた極少数の男を巡って、女たちの熾烈な争いが勃発。

しかもその争いに駆り出されるのは、母性よりも恋愛したい年頃の娘たちなのだから、事態は更に深刻化していく。

ある娘は、将来を誓い合った恋人との仲を引き裂かれた拳句、女たちに持ち上げられたせいで、でっぷり肥えた中年の妾として贈られ、またある娘は、類稀なる美貌と肢体を持ち合わせていたがゆえに、口直しとして胤ある男の下を巡らされた。

後を絶たない悲劇は、何もその主役を年頃の娘ばかりに求めた訳

ではない。

精力的な青少年、それも相貌・肉体、どちらかでも優れてさえいたなら、彼らは決まって昼夜を問わず、女の相手をさせられるのだ。それも恋愛感情を抱くには、あまりにとつうの経った女たちの、自分と（一方的に）愛する人との子が欲しい、という本能のためだけに。

時には投薬までされて、無理矢理性衝動を引き出されながら。

願望・欲望入り乱れての惨状は、まさに阿鼻叫喚の地獄絵図。

男女問わず、老いては若い肉を貪る姿は、そうして生まれる次代の子にまで、蝕まれる未来を約束していた。

そこにはもう、血縁の濃淡もありはしなかった。

あるのはただ、快楽を追い求める人間としての欲求と、絶える事を恐れる生物としての欲求のみ。

どちらの道を選ぶにしても、滅びはすぐそこ、目前まで控えていた。

だがしかし、ここに来て現れた一人の賢者が、呪われた地にある一つの術を授けた。

それが、異世界の血を招く、というものだった。

賢者は言う。

層を跨いだ呪いは強く、完全には解けないものの、異世界の血で呪いを司る点を貫けば、百年の実りは約束される　と。

呪いを司る点とは、層への侵攻を試みた王に乞われ、命じられ、脅され、唆され、二つの層を繋いだ術師の末裔、その女児四人。そこのか

果たして賢者の言葉に従い、招かれた異世界の血である男が、差し出された四人を貫けば、賢者の言った通り、リジェレイシカに住まう人間の営みは正常に戻ったという。

これまた賢者の言った通り、百年間だけは。

「そうそう、四人を貫くというのは、一夜で一気にという事でしゅえはっ!？」

「……………」

嬉々として自分たちの世界の危機を語った長の顔面へ、和真は器用に運動靴を当ててみせた。

椅子に縛り付けられている状態では、威力はさほど望めなかったものの、思いも寄らない攻撃をまともに受けた老人は、面白いくらい大袈裟に引っくり返る。

が、これを終始睨みつけていた和真は笑うことなく、柄の悪い舌打ちをした。

「ちっ。ただでさえ反吐が出るつてのに、どさくさに紛れて難易度上げてんじゃねえよ」

「こ、これは異な!」

緑の長衣から干からびた足と異様に白いパンツを覗かせつつ、がばつと起き上がった長は、立つ時に使わなかった杖で床を突くと、力を込めて言った。

「無銭で極上の女が抱けるのですぞ!？ それも四人も! 内三人は確実に処女!！ もう一人にしても白い結婚だったと聞き及んでおりますというのに!！」

「そういう問題じゃ……おい？ ちょっと待て？ あんた今、一人は結婚って」

「ええ、そうですとも! し・ろ・い、結婚ですぞ!」

「威張り腐るところか、そこ!！」

「ふぐほっ!？」

鼻息も荒く近づいてきた胸を狙い、不安定な姿勢のまま頭突きをかました和真。

長共々倒れそうになるところを、後ろに控えていた甲冑が元に戻しては、べしやっとな床に伏したのは先程同様、緑のジジイだけ。

「あー、ありがとう……?」

(つーか、ジジイは助けなくいいのか?)

一応、助けて貰った手前、疑問に思うところは多々あれど、礼を述べたなら、甲冑が微かに首を振った。

礼には及ばない、これも任務だ、といったところだろうか。

(にしてもコイツ……なんか可笑しくね? いや勿論、格好はこれ以上ない変さだが……そうじゃなくて、妙にちぐはぐな感じが)

例えるなら、サイズの合わない着ぐるみを着せられた、貧弱アルバイターのような。

(つても、まあ、問題はこっちよりあっちだな)

甲冑からヒクヒク震える長へと視線を切り替えた和真は、頭突きを忘れたていで話しかけていく。

「なあ、おい、じーさん。あんたの考えは大体判ったよ」

(男ならハーレム目指せつつうんだろ? 俺は御免だがな!)

「けどよ? 何だって既婚者まで引きずり出すんだ?」

(俺の周りの既婚者って言ったら、母親にいとこに、あと担任に? 何にせよ、碌な連中いねえし。軽く叩いたぐらいで体罰だって騒ぐのに、今時いねえだろ、階段下りる生徒に向かって、挨拶代わりにドロップキックかます教師なんて)

若干遠い目をする和真に対し、「ぐふっ」と出てもいない血を拭うようにして身を起こした長は、今度はきちんと杖を使って立つと、よろよろしながら深く息をついた。

「それがですな。実はまだ、先代の春告の姫が役割を終えてから、百年も経っておらず」

「じゃあとつと俺を帰せ」

「おぐつ！？ な、何故縄が解けて？」

「知らん！」

話の途中で立てた席。

気づかなかった和真は、指摘されても逃げる事なく、とんでもない告白をし出した長の胸倉を掴んで揺すった。

異世界からの無茶振り その2

ジジイこと長の話を要約すると、こんな感じである。

和真の前に召喚された異世界の男が、その役目を終えたのは今から七十年ほど前。

ゆえに本来であれば、次の異世界人召喚までには、三十年弱の猶予があった。

だがここで、ある一つの誤算が生じる。
その誤算というのが……

ある意味、人身御供と表すのが相応しい、術者の末裔である四人の容姿が、近年稀に見る優秀さだった、という事。

しかも、その美しさには重複が一切ないのだ。

これは男なら誰でもやりたいはず　そう言ったのは、あの威厳たつぷりの王様風のオッサン。

あれで昔はかなりのごによごにだった、という長の話はすっ飛ばすとしても、そんなオッサンに逆らう者は誰一人としていなかった。

いや、最初はいたらしいが、オッサンの説得に渋々応じてしまったそう。

何故なら、召喚される男にも好みのタイプがあり、件の七十年前の男が召喚された時の四人は、それはそれは男の好みにかき離れた容姿をしていたらしく、達成までに三十年近くを費やした、と記録されているらしい。

そしてその三十年の間、またしても若者たちが犠牲になったそう。だからこそ今、この時ならばいける、そう思っただけの判断だったという。

既婚者が混じっているのも、この中途半端でいい加減な判断のせい。

既婚者や他の四人の女は勿論の事、和真にとっても、非常に迷惑な話である。

しかも、迷惑はこれに留まらない。

長ことジジイがどこぞから託宣という、いかがわしい電波を受信して召喚された和真だが、じゃあ帰せ、といっても、帰すだけの力が残っていないらしい。

ただでさえ、百年掛けて召喚のための魔力を蓄えるところを、三十年弱も省略して使ってしまったせいで、力ある術師は皆、すかぴんになってしまったそう。

この世界には馬鹿しかいねえのか！？ と、憚ることなく和真が叫んでも致し方ないだろう。

とはいえ、元の世界へ帰るには元々、春告の姫 すなわち和真自身の魔力が必要となる。

無論、魔法とは縁遠い異世界人である和真には、魔力など最初から備わっていないため、この世界で手に入れないのだから、その方法というのが、和真にとっては本末転倒、それどころか更に難易度上がって、四人全員を孕ませる事だった。

何でも、異世界の男と交わった四人の最初の子は、必ず純然たる力を持つ精霊になるため、そこから膨大な力という名の祝福が得られるのだそう。

女孕ませて、その子どもに祝福させて、自分は元の世界にとんずら……。

エロゲーはエロゲーでも、鬼畜系かよ。

いかに長をボコろうとも、まだまだ純粹さを失っていない和真が、

突きつけられた現実に声もなく膝を落としたのは言うまでもない。

ちなみに。

先程から散々姫姫言われているが、この世界における姫は、和真の知っている語彙で訳すと巫女などの神職を指すようだ。

彼が交わらねばならないという四人の女も、それぞれが姫　すなわち巫女の名を冠しているという。

姫と同義の巫女。

それは確か、神に仕える現世の穢れとは遠い存在のはずで。

だからこそ余計に和真が打ちひしがれても、仕方がない事なのかもしれない。

話は判った。

しかし、納得したかと言えば、それはまた別の話。

そもそも和真はまだ、目の前にある生臭ファンタジーを現実として受け入れてはいなかった。

長に呼ばれて現れた、長よりも腰を曲げた禍々しい感じの老人が、おもむろに学ランの袖を上げて和真の腕へ鋭い刃を押し当てても

「って、おい！　いきなり何してんだよ！？」

危うく、極々自然に裂かれそうになった皮膚を庇い、自分の腕を抱いたなら、禍々しい老人が眇めた左目と、瞼を失くしたようにぎよろりとした右目で、和真の方を見つめてきた。

長相手ならば、幾らでもどつき漫才できた和真だが、この老人には言い知れぬ恐怖を覚えた。

少しでも隙を見せたり、ふざけたりしたなら、次の瞬間には胴体から離れた自分の首が転がっている、そんな想像が頭を過ぎる。

本当なら逃げ出したいところ。

それでも椅子に座っていられたのは、長とのやり取りの最中、自分を拘束していた縄を知らない内に解いてくれた、甲冑の姿があったからだ。

一応、和真を助けてくれるらしい甲冑が微動だにしないのだから、このそら恐ろしい老人も、無体な事はできないはず。

いきなり人の肌を裂こうとした相手だったとしても。

すると、警戒する和真をどう思ったのか、枯れ枝のような手ごと刃を袖へ隠した老人は、しゃがれた声の歪な歯並びにも関わらず、滑舌よく喋り出した。

「そう怯えるな、若人よ。わしはこの国の薬師。うぬがここで暮らすに当たり、その身体を調べるためにここにおる。血を採り、うぬの身体が何を受け付け、何を拒むか、知る必要があるでな。でなければ、ただの食事もうぬにとっては毒となろう。ささ、腕を出すが良い。なに、この刃は微量の血を採るためのもの。当てたところで薄皮一枚の傷もつかん。怯えるな、若人よ」

あまり大きくない声量にも関わらず、染み入るように届いた、不可思議な老人の声。

奇妙にも、信じたい気持ちにさせるそれを受け、和真はおずおずといった調子で、回収した腕を老人に差し出した。

「……本当、だな？」

「ああ、勿論だとも。姫の御身に傷を残しては、わしが刑に処されてしまうわい。……まあ、それも面白いやもしれぬが」

「おいっ!？」

「ひひひ。冗談じゃて」

「ったく」

全く笑えない冗談を吐いた老人に、つく悪態すら心許なく、近づくと刃を知り、先にある痛みを察し、和真の顔が顰められた。

押し当てられる刃、その冷たさ。

ひゅつと竦む喉、皮膚の上を滑る一筋の鋭利。

「つつ」

実際痛い訳ではないが、一瞬だけ、皮膚下の肉を裂く感触に声が上がれば、刃文の輪郭をなぞるように朱が滲んでいった。

そうして刃が退けば、老人の言う通り、残された腕には傷一つ見当たらない。

驚いて老人を見たなら、にたあつと笑った相手は何も言わず、用は済んだとばかりに部屋を出て行ってしまった。

狐狸の類に化かされた気分で老人の背を追っていたなら、ずっとと視界に割り込んでくる、古めかしい杖。

「春告の姫！　いかに姫といえど、我が妻は渡しませぬぞ！」

「……は？　妻？」

邪魔な杖を退け、声の主であろう長を惚け気味に見やれば、長い眉毛を吊り上げた長は地団太を踏みそうな勢いで怒り始めた。

「くつ、なんたる屈辱！　いいえ、ワシとて判つてはおるのです！　彼女の隣に、自分は相応しくない。否！　彼女の隣には、何人たりとも立てぬと！　いやしかし、それでも、それでもワシはあの人

が欲しかった！」

「……ちよい待ち、じーさん。俺の聞き間違いじゃなきゃ、今、妻つて言つたか？」

（女だったのか、あれ）

一人でハッスルするジジイに、冷静なつつこみを入れるが如く、重要な部分を確認する和真。

しかしジジイは何を思ったのか、恥らうように枯れた身体をくねくねし出した。

「はい、それはもう。正真正銘、ワシの妻ですじゃ。きやつ、言っちゃった！」

「つーことは、やっぱ女だったんだ……」

気持ち悪いジジイを視界の外にはじき出した和真は、ジジイの妻が去った扉を再度見つめる。

と、ここでジジイが浮かれた声のまま言った。

「どうでしたか姫！ 美人だったでしょう、我が妻は！ 昔もそれは美人でしたが、いやはどうして、今の方が何倍も美しい！」

「へー……」

まともに相手するのも馬鹿らしく、和真は気のない返事を返したが、ある事に気づいては、表情をピシッと固まらせてしまう。

（おいおいおい？ ちよつと待て？ 確かさつき、このじーさん言っただよな？ 四人の姫は極上の女云々って。それでこの審美眼ってことはまさか……？）

一夜で女四人と交わる そんな話に乗った覚えはないものの、これから出くわすであろう件の女たちの容姿に思いを巡らせた和真は、言い知れぬ不安に苛まれ、長の妻に恐怖を感じた胸を握り押さえた。

異世界の洗礼 その1

長が美人と評する彼の妻の容姿。

女とは考えもしなかった相手を例にとり、同じく、長が極上の女と評した、これから会うであろう女たちに恐れを抱いた和真だが、そんな思いも長くは続かなかった。

何せ、件の女たちと顔合わせするに当たり、身奇麗にする必要があると、和真は放り出されてしまったのだ。

湯殿という、未知の領域に。

脱衣所と思しき場所に押し込まれた和真に対し、控えていたらしい二人の少女が、恭しく頭を垂れた。

「この度、湯浴みにて姫のお世話を仰せつかった、アロマと申します」

「同じく、アルエと申します」

「へ？ え、あの……げっ!？」

和真は最初、何の事かさっぱり判らないと、入ってきたばかりの扉と二人を交互に見比べるものの、二度目に視線を彼女らへ移した途端、その姿に呻いて大きく一步、後退してしまった。

年の頃は和真と同じくらいだろうか。

アロマは赤みがかった茶、アルエは黄みがかった茶の髪を、頭に巻いたタオルの中へ隠している。

上がった頭により判明した瞳はどちらも同じ青で、どちらも似た

ような、それでいて可愛らしい顔立ちをしていた。

たぶん、双子なのだろう。

だがしかし、和真が後退した理由は、そんな生易しいものではなかった。

二人の着ているシャツと短パンが、明らかに薄手だったせいだ。

しかも色は全て白。

頑張つて薄目に見てみたところで、衣向ここの色の濃淡は明らかだった。

和真は一気に沸騰する気分を誤魔化すように、くるり二人へ背を向けると、多少なりとも上擦った声で叫ぶ。

「な、なんつー格好してんだ、お前ら！ 服着ろ、服！」

対する双子の反応と言えは。

「服、と申されましても」

「これが私どもの仕事着でございますが」

「……………」

恐れながら、という言葉が付きそうなほど、かしこまった二人の言葉に、クラクラする頭を抱えながら、和真はゆっくりと振り返る。そして今度は、遠慮を忘れたようにじろじろ、彼女たちの格好を見やった。

下から柔らかかな丸みが見え隠れするシャツの左右には、ツンと上向く二つの突起。

腰よりも下のラインに添う短パンの紐は、今にも外れそうな蝶々結びを左右に飛ばしている。

そこから伸びる薄手の布の前、礼を取るためなのか、それとも恥じらいゆえか、重ねられた両手はしかし、全てを隠すに至っていない。

(……………こういうのも、猥褻物陳列罪とか言っただろうか)

目前に控える少女たちを認めたくない頭が、ふと、そんなどうでもいい感想を述べていく。

と、ここで、和真は二人の手が震えていることに気づいた。

視線を上向かせれば、下唇を軽く噛み、何かに耐えている様子の同じ顔が二つ。

薄っすら上気した頬と潤む瞳が、彼女たちの羞恥を如実に訴えていた。

（これってつまり、あれってヤツか）

推測するに、この二人は異世界の男が来るに当たって、その世話を押し付けられたのだらう。

それも世話相手が姫と呼ばれる身分を考えると、本当ならこんなことをしなくてもいい家柄の、いわゆる良家のお嬢様の存在だけに違いない。

しかもこの反応は、完全に嫁入り前。

（つつても一人、嫁入り前でも平気で似たような事する奴はいたな

……俺はあれを女と認めたくねえが）

親父より中年オヤジな姉。

過去、風呂から上がる際、「パンツ忘れたー」とか何とか言っただけで登場した奴のせいで、居合わせた父は盛大に酒を噴出していた。

二次被害を受けたのは、遅い夕飯を取っていたために、父の唾液入りの酒を頭から被った和真とその周辺。

ぽつと浮かんだ嫌な思い出を消し去るように、和真が溜息をついたなら、前方で佇む二人がビクツと身体を揺らがせた。

いつの間にか落ちていた視線を上げれば、再び唇をきゅっと引き結び、辱めに耐える二つの同じ顔が出迎える。

「……とりあえず、風呂に入ればいいんだろ？」

極力二人から視線を逸らし、呆れたようにそう言えば、「は、はい」と小さな声が帰ってきた。

これに深呼吸がてら大きく息を吐き出した和真は、すたすた歩き

出しては、慄く二人を素通りし、籠に入った服らしき白い布を見て振り向いた。

「で、上がったらコレを着るんだな？」

後ろは後ろでくつきり映る、二つの綺麗な桃の陰影をぼかしつつ、どう着るのかいまいち判らない布を指差せば、ぽかんとした二人が慌てて姿勢を正し、こくこく激しく頷いた。

「は、はい」

「す、すみません、ただいま」

初対面の異世界人、それも男に、誰にも見せたことのない肌を見せる。その恐怖心から役割をすっぱかしてしまっただろう二人が、顔を青くしながら慌てて駆け寄ってきた。

「いや、いい」

すかさずこれに手の平を向け、制止を求めた和真は、顔を逸らした状態で言った。

「なんつーか、その、あんたらの仕事を奪うようで悪いんだが、俺は誰かの手を借りて入浴とか全く慣れてないんだ。だから、そのままで頼む」

「で、ですが」

怒らせたとも思っているのか、追い縋るような声を死角に聞いた和真は、何とか笑みを見繕うと、なるべく穏やかになるよう努めて続けた。

「けど、使い勝手も違うからさ。判らないところは教えて貰えると助かる」

（だからマジで頼む。それ以上、俺に近づかないでくれ）

常日頃、女の黒い部分だけを見て育ってきた和真だが、女に全く興味がないかといえば、そうでもない。

かといって、こんな訳の判らないところで、自己犠牲精神を全面に出した少女に手を出す、なんて事はしたくなかった。

いや、もっと正直に言おう。

キスの経験もない和真にとって、処女というのはすこぶる面倒臭い相手だった。

特に、ワンクッションとなるはずの感情もないのに、「痛い」だの「止めて」だの騒がれた日には……。

熟達の女から手ほどきを受け、全部終わってすつきりして、その後で「へたくそ」とただ一言突きつけられるよりも性質が悪かろう。無論、全ては知識だけの妄想ではあるが。

だからこそ彼女たちに背を向けた和真は、学ランに手を掛けつつ、心の中で小さく愚痴った。

（くそっ！ 女だけが見られて恥かしいと思うなよ！？ 背中に入分の視線を受けながら脱がなきゃならねえ、こっちの身にもなってみろ！！ 露出狂じゃないってのに、何でストリップ紛いのことをしなきゃならねえんだよ、おい！！ ああくそっ！ いっそ見るんじゃねえって啖呵が切れりや、どれだけマシか）

実際言ったなら、間違いなく小者扱いされる。

たとえ夢だとしても、よく知りもしない相手から、そんなことで変なレッテルを貼られたくはなかった。

そんなこんなで全てを脱ぎ終えた和真は、隠すために身を丸めるでもなく、背中を向けた状態で後ろにいる二人へ声を掛けた。

「湯はこっちでいいんだな！？」

少しばかり声が引っくり返ってしまったが、右手にあるそれらしき扉を指差し、自棄気味に怒鳴れば、アロマかアルエか判別できない声が「は、はい」と返事をしてきた。

「よし」

偉そうな顔きは、己を鼓舞するために。

短い距離ではあるものの、もしかしたら移動中、二人に見えてしまいう可能性があるので。

すっかり萎縮している突出部は勿論、がちがちに強張っている顔や、体育会系に縁遠い肉体が。

男性経験があろうとなかろうと、男性的な魅力が大いにあるとは

言い難いこの身体に、二人がどんな感想を抱くのか。
考えれば考えるほど恐ろしくてしょうがない。

ゆえに和真は二人を見ずに扉を開くと、襲い来る白い蒸気もなん
のその、自ら進んでその中へと入っていった。

異世界の洗礼 その2

和真が入った湯殿は、脱衣所こそ銭湯に近い造りであったが、肝心の浴槽がある部屋は少々趣が異なっていた。

「まずは身体を洗う、のは良いとしても。どこで洗えばいいんだ、これ？」

薄い布の守りがあつたとはいえ、全裸に近い二人の少女を、扉一枚隔てた向こう側に置いてきた和真は、幾らか落ち着いた頭で首を傾げた。

白い蒸気が視界を隈なく覆う部屋には、それに見合うだけの大きな浴槽がたつぷり湯を張っているのだが、洗い場らしきスペースがどれだけ見渡しても見つからない。

「一応、洗面器っぽいのと椅子みたいのは一組ある……ってことは、この湯を使つて洗う、でいいのか？」

床と浴槽の境に風呂道具を認めた和真は、とりあえずそちらへ向かい、風呂桶よりも洗面器に近いそれで湯を汲んでみた。

手を入れれば、少し熱めの温度が感じられた。

何ともなしにそれを床に流してみたなら、一方向に流れていき、その先にある排水溝らしき網の中へ、湯が吸い込まれていった。

「……どういう世界観なんだ、ここ？」

自分の夢ながら判んねー、とぼやきつつ、どうせならシャワーがあれば楽なのに、と思う。

簡素な椅子に視線を移した和真は、おもむろに腰を下ろす、なんてこともなく、つるつるした床の上を滑らせた。

床より低い浴槽内の湯を使うのに、椅子はどうあっても邪魔にしかならないだろう。

（何でこんなもん、常備されてんだろうな？）

疑問は尽きない湯殿だが、ここで身体を洗わなければ、納得しない連中が外にはわんさかいる。

差し当たっては、脱衣所にいる二人だろうか。

「そーいやあいつら、あの格好のまんまなのかね？ 城ん中は寒くなかったが、学ラン着てたしな、俺。湯気がある分、こっち来させた方が良かったか？」

和真は誰に言うでもなく一人ごちると、浴槽前に膝をつき、再び汲んだ湯で首から下を流した。

次いで「いやいやいや」と、浮かんだばかりの自分の案を笑いながら却下した。

「良くない良くない。たとえ寒かろうが、こっちに來たら、水蒸気ですぐにエロい感じになっちまうって。それに、本当に寒いなら何か着るだろ。ああでも、着るもんなかったら寒いかもなー。かといって、こっち来いっつーのもなー。完全に勘違いさせちまいそうだし」

温まる身体に少なからず罪悪感を抱きながら、やれやれと首を振る。

傍らでうつかり想像してしまった、双子の「エロい感じ」も、苦悩とともに払うつもりで。

すると。

「お優しいんですね」

背後から届く、静かな声音。

しかし、これを想像したがゆえの幻聴と捉えた和真は、「いやいやいや」と手を振ってなかった事にし、はっと気づいては濡らしていない頭を掻いた。

「そーいや、シャンプーとか、どこにあるんだろうな？ もしくは石鹸……しゃーねー、あの二人に聞いてみつか」

湯を掛ける手を止めたところで、絶えず起こる蒸気は和真の身体を冷やさない。

このため、洗面器を局部に被せた和真は、立ち上がりつつ背後を

向くと、一步前に出ようとじ。

むにつ。

「きやつ」

「え？」

眼前が蒸気とは違う白に覆われ、両頬に滑らかな柔らかさを感じた。

しかしてそれも、束の間の事。

「きやあつ！？」

「おおっ！？」

突然の接触に踏み出していた和真の足が動転し、着地を誤ってあらぬ方向へ着けば、同じく動転していた身体がぐらついた姿勢のまま、前方へと倒れていく。

「アロマ！」

手から離れ落ちた洗面器の音が、甲高い叫びと共に広い湯殿に響いた。

と同時に、身体が一瞬だけ静止したものの、倒れる事に変わりはない。

「くふっ」

どささっ、ともつれ落ちる音に続き、和真の頭が柔らかな白の上でバウンドしたなら、頭上から苦しそうな声がやって来た。

だが、和真にはそれが何なのか、確かめる余裕がなかった。

それと言うのも、湯殿には自分しかないはずで、似た声質を持つ双子の少女は脱衣所にいるはずで、こんなところで自分と共に転ぶはずはないのだ。

しかも、事もあるうちに和真の頭を、胸らしき箇所押し付けた形で。

（……おいおい、冗談はよしてくれ？）

思いつつ、起き上がりついでに左頬をくすぐる部位へ、手を押し

当てる。

「あつ」

途端、返ってくる感触は張りのある柔らかさながらも、手の平の中心に硬い存在を主張しており、僅かならから上がった声の先を見やれば、潤んだ青の瞳が見つめ返してきた。

纏め上げられた赤みがかった茶髪は、確か

「あ、アロマ、だっけ？ な、何してんの、お前……？」

（いや、この場合の何してんのは俺か？）

「わ、悪いっ！」

目の前にいる人物が信じられず、しかし確かな感触に混乱した和真は、大急ぎで身を起こすと、甘い余韻にほだされそうな分身を庇い、尻を使つて後退した。

視界を広くしてみれば、和真に触れた右胸を庇いつつ、身を起こすアロマを、後ろからアルエが心配そうに支える図がある。

位置関係から推察すると、先程一瞬だけ静止したのは、アルエがアロマを助けようとしての事だったらしい。

麗しい姉妹愛。

しかし視点を変えれば、湯気に張り付く薄布一枚で絡む二人の、えもいわれぬ妖しい様。

和真は双子の美少女の間に漂う、一種異様な雰囲気生唾をごくり呑みこむと、正座をして局所を伏せさせ、間に合わない部分を両手で隠しながら上擦った声を上げた。

「だ、大丈夫か？」

「大丈夫か、ですって？」

と、ここでアロマを支えていたアルエが、鋭い視線を和真に向かって投げてきた。

「安否確認をするくらいなら、こちらへ来て、アロマへ手を貸すのが普通ではありませんこと！？」

（げげっ）

かしこまった態度はどこへやら、距離を置いた和真へ食って掛か

ってくるアルエ。

「あ、アルエ、私は大事ありませんから」

和真が引いたのを知ってだろう、胸を押さえていた手で、自分の身体を支えるアルエの肩に触れたアロマは、「ですがっ」となおも苛立つ双子の片割れへ、ゆっくりと首を振ってみせた。

これへ一瞬、悔しそうな顔をしたアルエは、首を振って何かを断ち切ると、複雑な表情を浮かべつつ和真へ頭を下げた。

「申し訳ございません。出過ぎた事を申しました」

「い、いや。あんたの言う通りだ。俺も悪いとは思っているんだ。ただ……」

「ただ？」

煮え切らない和真の言葉に、顔を上げたアルエが眉を顰めてくる。訝しげなその視線から逃げるように、そそくさと背を向けた和真は、肩を小さく丸めて「ぐっ」と呻いた。

（い、言える訳ねえだろ！　ただでさえ、蒸気でエロい事になって
いるつてのに、あんたがいきり立ったせいで、アロマの立てていた
膝が若干崩れて、色々丸見えになってるぞ、なんて！　それで近づ
けないなんて、言える訳が　）

「あの？」

（ひいつ！？）

ぺたりと背中に置かれた手。

恐怖映画の登場人物さながら、ぎこちない動きで和真が振り向けば、透け透けの服に気づいていない自然な顔つきで、アルエが気遣わしげにこちらを見つめていた。

「もしかして、どこかお加減が？」

「……………！！」

大人寄りの身体つきに、あどけなさの残る相貌。

背徳的な香りが匂い立つ場面に、ぶんぶんと音が出そうなほど首だけ振れば、困惑したアルエが「あら？」と小さく声を上げた。

「どうしました、アルエ？」

「それがどうも、お怪我をされているようで」

（け、怪我？ 怪我なんて俺は別にどこにも……）

別の意味で痛くなりつつあるところはあれど、転んだ時にさえ傷はつかなかった。

アロマというクッションがあつたお陰で。

「うっ」

（く、くそっ！ 静まれ、この愚息！）

危機的状況下、うっかり思い出してしまった柔らかさに、とある部分が硬さを覚えていけば、暴れ馬にしてなるものと、封じ込める手にも力が入る。

せめて後ろの二人がいなくなってくれれば　そう思い、口を開こうとするが。

「は、ぐっ」

出てきたのは切羽詰った唸りだけ。

魅惑的な双子の美少女の存在もさることながら、心地良い蒸気の温もりが、落ち着こうとする和真の努力を無駄にしているせいだった。

（や、べっ、も、限界……！）

和真にとって何が不幸かと言えば、それは勿論、双子の美少女がそこにいたこと。

そして、彼女たちにとって何が不幸かと言えば、それは勿論

「姫？ どうされたのですか、姫？」

「姫、何が　あうっ!？」

和真の身に何が起きているのか、知識としてあっても實際目にした事のない双子は、彼が必死に隠そうとしていたモノを怪我と勘違いして暴いた瞬間、その洗礼を受けてしまうのであった。

よくじょう最前線 その1

ばしゃばしゃと軽い音を立て、一つしかない洗面器で顔を洗う少女が一人。

「うえええええ、最悪うゝ……洗っても洗っても、何か気持ち悪い」

「駄目よ、アルエ。姫の前でそんな事言つては。姫もそういつもりだったわけではないのですから」

「うう……アロマには判りませんわ、私のこの気持ち。飛沫が少し服についた程度なのですから。それに引き換え私は顔ですよ、顔！もう、信じられません！」

「それも仕方ない事でしよう？ 何せアルエと来たら、姫が隠しているところを無理矢理引き剥がして」

「怪我をされていると思ったんですもの！ですから、早く手当てをと思つて。それなのにそれなのに、ふぎゅっ……こ、これでは、お嫁に行けませんわ！」

水の滴る顔を両手で覆い、アルエが泣き言を喚けば、優しく伸びたアロマの手がその頭を撫でていく。

「安心なさい、アルエ。私たちはもう、お嫁に行く必要などありませんのですから」

「ふうっ？ お、お嫁に行きませんか？」

「ええ。というか貴方、お父様のお話をきちんと聞いていなかったの？ 姫にお仕えするに当たっては、姫が私たちを棄てない限り、私たちは姫の所有物、すなわち姫のお嫁さんみたいなものなのですよ？」

「姫の？……って、つまりはこの方の？」

「ええ、この御方の。だから姫のご要望とあらば、先程のような事も喜んでしなければなりません」

「喜んで……ご奉仕、ですの？」

「ええ。一緒に頑張りますよう、アルエ」

「……アロマも一緒なら、私も頑張ってみます」

そつと伸ばされるアロマの手に、絡み合うアルエの手。

双子の間でそつくりの笑顔が交わされれば、和やかな雰囲気蒸気の中に溶け込んでいく。

和真はそんな双子の様子を、仰向けの放心状態で眺めていた。

暴かれた瞬間、抑え切れなかった猛りをアルエの顔面という、順序もへつたくれもない場所へぶつけた分身は、軽く開いた股の上でしよばくれている。

アルエの洗顔のために使われた洗面器が、少し前まで洗ってもない、数回流しただけの其処を覆っていた　と伝える口もない和真。

腕を使い、中途半端に起きた彼は、股を越えた先にいる双子へ、段々と疑問を抱き始めていく。

全裸の男、それも双子の片方へとんでもない粗相を働いた一物付が、近くで倒れているというのに、逃げるでもなく妙な慰めで姉妹愛を深める少女が二人。

しかも湯の蒸気を多分に吸ったせいで、どちらもほぼ全裸状態になっっているにも関わらず、だ。

どう考えても異常だろう。

（なあ、おい？ これは夢、だよな？ いや、夢じゃなけりや可笑しいだろ？）

奇妙な光景を目の当たりにし、放心状態だった和真の目に、徐々に光が取り戻されていく。

かといって、それが正気の色をしているとは限らない。

（そうだ、そう。夢に違いない。普通だったらここは、何すんのよ！？ とか何とか叫んで、洗面器か椅子で俺の股間を再起不能になるまで痛めつける場面だろ？ 俺にその気がなくても、原因がそっちにあっても、アイツらはいつだって話を聞きやしないんだ……）

思えば、光の速さを髭髯とさせるスピードで流れていく、和真の女難のエトセトラ。

ふつつつと、当時は完全に押さえ込まれていた、腹の底から沸き上がってくる怒りを感じたなら、（そうだ！）と和真は思った。

（大体、今回の事だって、全部お前らのせいだろ？ 俺は来るなつつたよな！？ それなのにここへ来て、かと思えば人の進行邪魔しやがって。その挙句、自分たちの破廉恥な格好差し置いて、勝手に被害者面するとは何事だ！？）

再燃した怒りというのは、なかなかどうして、当時の怒りよりも収まりにくいものがある。

その典型を示すように勢いよく立ち上がった和真は、足元で向かい合い、驚いた目でこちらを見つめる双子へ、びしっと指を突きつけた。

ただし、指の先は脱衣所へと続く扉の方向。

「……とつとつ、出て行け」

怒鳴り散らしたい思いを押し殺したような低い声が、和真の口を吐いて出る。

かーぜもないのにぶーらぶら、は今更隠したところで意味もないため、もう一方の手は堂々と、ひよろひよろした腰に当てられている。

気分は犬に命令する飼い主である。

しかし当たり前前の事ながら、双子は犬でもなく、和真にしても彼女らの飼い主になった憶えはない。

「出て行け、と申されましても」

「私たち、姫のお世話を仰せつかつておりますし」

手を合わせ、頬を付き合わせて、きよとした顔をする二人。

密着度の高さに互いの胸を僅かに潰し合っても、彼女たちは和真の足元から、彼の様子を伺うばかり。

「っ！」

どこまで行っても目の保養　ではなく、目に毒な光景を前に、元氣を取り戻しそうな部位を感じた和真。

慌てて隠そうとしても、手から其処までの距離は遠く、異変に気づいた双子が凝視し出しては、中途半端な格好で止まってしまった。

「あら」

「きゃあっ」

興味津々に眺めるアロマに対し、また掛けられては堪らないとばかりに、両手で顔を覆うアルエ。

しかし指の隙間から、やはりアロマと同じように見つめる青い瞳があつたなら、寄つてたかつて視姦される側に回ってしまった和真は、途端に勢いをなくしてしまった。

隠そうと頑張る自分に対し、裸体を惜しげもなく晒す双子に、何だか負けた気分を味わったのが、主な原因だ。

「あら……」

「まあ……」

和真のそんな落ち込み具合を写し取ったのか、力を失くしたソレに、双子が残念そうな声を上げた。

「……」

「……」

「……」

和真自身も沈黙すれば、同じく双子も沈黙を返してくる。

白い蒸気が覆う湯殿で、全裸の少年とほぼ全裸の双子の少女が、高低差をもつともせず、互いをじっと見詰め合う事、しばらく。

おもむろに動き始めたのは少女たちの方。

一人が椅子を持つと、もう一人が洗面器に湯を汲み始める。

「姫、こちらへどうぞ」

そう言ったのは、和真の背後に椅子を置いたアル工。

緊張の取れない肩にほつそりとした手を添え、椅子に座るよう誘導した彼女は、蒸気で濡れた和真の頭に胸を乗せると、肩に添えていた両手を伸ばし、目の前で擦り始めていく。

「姫は異世界の方ですので、ご存知なかったかもしれませんが、身体を洗うにはこのように手を擦るだけで、ほら」

しっとり輝く手が擦られる度、生まれてくるきめの細かい白い泡。

「この泡は蒸気が元になっておりますの。ですが、蒸気を浴びるだけでは泡は立ちませんし、身体を洗った事にはなりません。このように、摩擦を加えなくては……」

「ふおっ!?!」

離れたかと思いきや、背中を滑り始めるアル工の肢体。

上下の動きに合わせて、アル工の説明通り、泡が背中に生じていくのが判る

ものの。

「い、いきなり何してんだ、おま」

「ああ、姫、駄目ですわ、動いては。こちらをお向きになって?」

「ふざけるのもたいが おぶっ!?!」

身を振ってアル工を遠ざけようとすれば、半ば強引に戻された顔が、憶えのある柔らかさに包まれてしまう。

その間にも、背中に寄り添うアル工の動きは止まらず、回されていた彼女の手が和真の前面を、我が物顔で擦っていくのが、暗闇の

中で感じられた。

「~~~~~!!」

迷いを吹っ切ったかのように、それでいて繊細な動きで、和真の肌を伝う指先。

と思えば、頭の中に同じ指が差し込まれていった。

闇の中で次々行われていく動作に、兎に角、視力を取り戻さなければならなかったと考えた和真は、顔面を覆う柔らかさを引っぺがすべく、弾力のあるソレを両手で掴んだ。

途端、「きゃっ」と短い悲鳴が上がり、強要された闇が弾んだものの、変化はそれだけ。

試しに手中のものを揉んでも、知識だけを頼りに尖った周辺を親指で擦っても、視界の改善には至らず。

「あんっ……姫、お願いですから、じっとしていて下さいませ。でないと目に泡が入ってしまいますわ。お戯れなら湯に浸かりながらにして下さい」

それどころか、和真の頭をきゅっと抱き寄せた闇 胸の谷間に和真の顔を捕らえたアロマは、喘ぎに似た声でそんなことを言うてくる始末。

（目に泡!? シャンプーハットのもりなのかよ、この格好!? つーか、湯に浸かりながらならいってなんだ!?）

自分でやっておきながら、正気の沙汰とは思えないアロマの言動の数々に、和真は言い知れぬ恐怖を抱いた。

そして抱きついでに、胸から腰、尻の側面へと手を下ろしては、その肉感を直に確かめるように、ぺったり張り付いた守りの下から、手の平を差し込んでいった。

一度目の忠告を無視した暴挙を、許すはずもないと考えて。しかし。

「ひ、姫……判りました。姫のお好きな様になさって下さいませ。ただ、お顔はこのまままでお願いしますね?」

何故か許された。

それも、困った子、と言わんばかりに頭を優しく撫でられながら。

よくじょう最前線 その2

全裸で椅子に腰掛ける和真の前には、シャンプーハット代わりの胸にその顔を埋めさせ、髪を洗うアロマ。

後ろには、和真の背中を身体を使って流しつつ、回した手で和真の前面を丁寧に洗っていくアルエ。

そんな刺激的な格好で、双子の美少女に前後から洗われ、ついでに両手をアロマの尻に差し入れている和真は、さぞかしだらしのない顔を彼女の胸の中でしているかと言え……そうでもなかった。いや、それどころか逆に、顔色を真っ青にさせているくらいだった。

[illegible]

なんだこれ以外の言語を忘れたていで、ぐるぐるその言葉だけが、

現実にこんなことが許されるはずもない。

ならばこれはやはり夢？

だがしかし、それを肯定するには乗り越えなければならない壁がある事に、今になって和真は思い当たってしまった。

何せ彼は、夢の中ですら、こんな願望を抱けるほど、女に希望を持った人生を送った憶えはないのである。

和真が生きてきた十七年という月日は、その大半を女難に食いつぶされていた。

そして残りの成分は、少しの友情を除き、女難の副産物として現れる、女の熟成された濃厚な黒い部分で占められている。

一夜で四人の女を、の部分、どこかで聞きかじったかもしれない

いエロゲーのイントロから来ている、そう解釈することも可能だろう。

だが、双子に挟まれるこの状況は、どう足掻いても和真の夢になるはずがなかった！

悪夢、なら十分在り得るが。

（し、死んで堪るか！！）

甘い夢と評しても過言ではない湯浴みの場面を、案として浮かんだ瞬間に、悪夢終わりで現実死にオチと断定した和真。

時を同じくして、アルエの手が優しく包み始めるのを感じたなら、大切な息子を守るべく、和真は勢い良く立ち上がった。

「きゃっ、ひ、姫？」

「うきやあっ！？」

闇から脱せば、自然と引き寄せる形になったアロマとは違い、しなだれる先を失ったアルエの身体が、椅子を腹に抱え込むようにして倒れ、咄嗟に和真の腿を掴んできた。

「あ、あの……」

密着する和真の身体に、尻を掴まれたままのアロマはドギマギし。
「は、は、はあ……お、驚いてしまいましたわ。もう、姫ったら、いきなり何を　　ひっ」

和真の腿を掴むことで、顔面強打を免れたはずのアルエは、そこが誰の股の下とも考えず顔を上げたせいで、ぺちよっ、と別のモノに額を叩かれてしまった。

「姫……」

「い、や」

赤くなるアロマと青くなるアルエ、そんな二人を前と下にした和真は

「ふっ……ふふふふふふふ。ふじゅんいせいこうゆう、はんた

「いつつ!!」

ぶっ壊れた。

ぶっ壊れてしまった。

今もって現実とは認められない、かといって夢という訳にもいかない、死にオチが待っているであろう悪夢を前にして。

不純異性交遊真っ只中の己を全否定した和真は、宣言と同時に、アロマの尻に置いていた手を上へ移動させると、薄い布の要である紐を力任せに引き千切った。

「きゃあっ!!?」

見た目は全裸でも、薄い布の感触に安心を見出していたのだろう。下半身が涼しくなったことで取り乱したアロマは、それまで隠すのを忘れていた前に両手を押し当てると、和真から大きく一歩退いた。

その間にもキレた和真の行動は続き、上半身を後ろに向けた彼は、頭を股に潜り込ませたアルエの、背中に張り付いた布を下から掴むと、一気に引っ張り裂いていく。

「やあっ!」

こちらアロマ同様、涼しくなった胸を押さえた姿で股の下から脱すると、尻餅をつくようにして、和真から離れていった。

「ふうっ、ふうっ、ふうっ……うーふーふーふーふう」

「ひ、姫　痛っ!」

「アルエ!?　姫、お止め下さ　くうっ!」

荒く息をついた和真は、慄くアルエの髪をタオルごと鷲掴んで強引に立たせると、暴拳を止めるよう求めたアロマを小脇に抱え、遠い胸を抉るように掴んだ。

「い、たっ……やっ、抜けちゃうっ」

「ひ、め、お願……いた、痛い……うっ」

頭皮ごと剥がれそうな痛みに、胸を庇うことも忘れて、アルエが目端に涙を浮かべる。

撫でられることにすらまだ慣れていない片胸が歪む痛みに、下半身を曝け出したアロマが苦悶を浮かべる。

しかし和真は二人の様子を一瞥することなく、脱衣所までの道のりを、壊れた薄笑いを貼り付けて歩いていった。

それぞれに逃れられない痛みを抱えた双子が、どれだけ泣き叫び訴えても、和真の歩調は淡々と進み。

「ひあっ」

「あぐっ」

和真が彼女たちを投げるように解放したのは、脱衣所の扉を足で開いてから。

ぞんざいに扱われた双子が、受身も取れずに床へ叩きつけられるのを見届けた和真は、その顔が上がる前にぴしゃんっと脱衣所の扉を閉めた。

くるり背を向けては、扉に寄りかかってクツクツと肩を揺らす。

「くっ、くくくくくく……はあーはっはっはっはっ！……ど

おだ、ざまあ見る！俺は惑わされないぞ！女なんかに、女なんかに女なんかに女なんかにっ！誰がっっっ ああ？」

不意にがくつと落ちる膝。

訳も判らず下を向けば、視界の動きを追うように、どすんと床についた尻。

と思えば霞んでいく目の前、くらくらする頭が左右にぶれる。

「うつ……くそっ。奴らは追い出したつてのに、何で……」

次第に荒くなっていく息に耐え切れず、そのまま倒れてしまえば、折角閉めた扉が開く音。

誰かが遠く「姫っ!？」と叫ぶ声を耳にする。

「死ぬ、のか？ 夢、なのに……イイ目、ふいにして、追っ払った、つてのに……」

女に希望を持つ事はなくとも、双子の感触は非常に気持ち良かった。

閉ざされる瞼の闇に、甘い温もりを思い出せば、後悔だけが朦朧とする意識に宿っていく。

（あーくそ。どうせ死ぬんなら、アイツらにもっと好きにさせとくんだった……。）

和真は力任せに双子を引き摺った手を、どことも知れない場所へ伸ばすと、唐突に気を失ってしまった。

と思つたのも束の間。

（……ん？ あれ？ 俺、生きてる？ つーか、何か左手が柔らかい）

意識が浮上してきた和真は、瞼を閉ざしたまま、何かを軽く掴んだ左手の指をやわやわと動かしていく。

「ひゃんっ。あ、アロマ、姫が、お気を、取り戻されたようですねんっ」

すると瞼向こうで、何かに悶えるアルエの声が聞こえてきた。

「……見れば判りますわ」

続いてどこか不機嫌なアロマの声も。

（アロマにアルエ……ってことは、ここはまだ夢、いや、悪夢の中？）

思いつつ、手に馴染む丸みの輪郭を擦れば、上擦った甲高い声が何度か上がった。

その内に見つけた突起を手持ち無沙汰に弄くれば、「やつ、そんなっ」という喘ぎが聞こえてくる。

と、身体と平行になっていた右手が、ゆつくりと持ち上げられていった。

頭の斜め上で動きが止まったなら、甲に擦り寄ってくる似たような丸み。

「酷いですわ、姫。先程は散々触れて下さったのに、私には痛みだけ残してアルエばかり」

「し、仕方ありませんわ、アロマ、あ。何せ姫は、無意識で、掴まれている、のですもの」

「判っています！ 判ってはいますけど……意識が回復されたのでしたら、少しくらい、私に触れて下さっても」

（何言ってるんだコイツら？ 姫ってるのは俺だよな？ 触れるって何を）

和真が不思議がれば、痺れを切らした様子のアロマと思しき両腕が、右手の甲を更に丸みへ押し付けていく。

その方向と双子の会話内容、そして今なお弄り続けている左手の感触と、連動するアルエの喘ぎ。

（まさか……？）

嫌な予感に和真はゆつくりと、瞼を開けていった。

光の眩しさに顔を顰めつつ、どこかへ向かって伸びる左腕の先を追えば、

「姫、お目覚めですか？」

それはほんのり頬を染めて迎えるアルエの、初めて見るブラウス姿の中に。

「う、わ、悪い！」

慌てて引き寄せ引つ込めたなら、和やかだったアルエの顔に不機嫌が宿り、代わりにアロマの声が楽しそうに変わっていった。

「そのような顔をしてはいけませんわ、アルエ。姫、お水をどうぞ」

「あ、ああ、悪い……」

後ろからやって来た水差しが、直で口に挿入される。

カルキ臭のない滑らかな舌触りに、喉を鳴らして飲めば、カラに

なる前に水差しが引き抜かれていく。

間の悪いその動きにより、和真の口の端から水が零れば、またしても後ろから伸びた繊細な指が、滴る流れを絡め取った。

「姫？ お加減はいかがでしょう？」

離れる指とアロマの声を追い、顔を上向きにさせた和真は、拭ったばかりの指の雫へこれ見よがしにうつとり口付ける彼女の、やたらと扇情的な画に遭遇。

「な……にをしてるんだ、お前？」

ついでに自分の右手がアロマの胸に埋められているのを発見すると、頬を引き攣らせて問いかけた。

と同時に、今現在、自分の頭がアロマの膝　　というか身体を枕にしていると知ったなら、焦る勢いに任せて上半身を起き上がらせた。

が、しかし。

「くあつ　んぶつ」

横になっている時は感じなかった鈍痛が和真を襲い、バランスを崩した身体は前にいたアルエの胸に着地。

「やんつ、姫。 いけませんわ。 のぼせているのですから、しばらくじっとしていませんと」

（のぼせ……ああそうか。 俺、死んだんじゃないくて、のぼせたのか）
和真は段々と飲み込めてきた状況に、億劫な頭をアルエの胸に預けながら嘆息した。

露出派？ 着衣派？

服越しに香るアルエの体臭に、えもいわれぬ心地良さを感じて目を細めた和真は、自分の身体にも学ランではない服の質感があることを知った。

（置いてあった服が。ってことは、身体の泡を落とした後で、着せられたんだろうな。元々見られてはいたが……なんか恥）

まるで赤ん坊ではないか。

そんな自分を隠すように、更にアルエの谷間へ顔を押し付けると、乾きかけの頭がそつと撫でられていく。

目だけを上にやれば、同じ年ぐらいの容姿に母性を宿した瞳が、和真のことを優しく見つめていた。

タオルから解放された黄みがかった茶髪が、柔らかな波を描いて流れていけば、なおさらに。

（母性……って、そっちにもあんまり、いい思い出はないんだが）

脳裏に過ぎる一家の大黒柱　を日々揺さぶる、一家の鬼將軍の姿。

一応、それなりに子として守られてきた記憶はあるものの、その守り方たるや、小熊を守る母熊の気性そのもの。

守られているはずなのに、自分の方がうっかりで始末されそうな気配がひしひし漂っていた。

とはいえ、アルエにあるのは優しさだけに見えたため、知らず知らず調子に乗ってきた和真は、倒れた拍子についた左手で、彼女の胸を僅かに揉んだ。

するとアルエは少しだけ目を見張り、瞳を潤ませては微笑みを深めていく。

だがそれは、母性に留まらない艶めきをアルエにもたらすもの。それに惑わされる形で喉を鳴らした和真は、肌蹴たままのブラウスから覗く、白い曲線を目に留めると、果実を貪るように口を開い

て食もつとし。

「姫！」

「うおっ！？」

背後からの怒声に驚いた和真が動きを止めたなら、アロマがブラウスを脱ぎ脱ぎ、肩紐のない、レオタードを髣髴とさせる下着の力ツプを、上からぺろんと捲って見せ付けてきた。

左右の内、手跡のついた左側の胸を堂々と揃えた手で示しながら。「触るのでしたらまず、私からにして下さいませ！ アルエばかりそんな、優しくなんて酷いですわ！」

「なっ、いきなり何言っただ、お前……？」

正気とは思えない訴えを受け、アルエに後頭部を預ける格好でアロマに向き直った和真は、赤みがかった茶髪の毛先で見え隠れする淡い先端をチラ見しつつ、涙目になっている青い瞳へ眉根を寄せた。のぼせが取れないせいで、男の本能に準じてしまう和真に対し、アロマが四つん這いで迫ってくる。

和真の胸で交差する、アルエの腕の前まで覆い被さったアロマは、ぐつと顔を近づけると、今にもキスしてしまいそうな距離で言った。「お願いします、姫。湯浴みのお世話が終わってしまった今、次に姫にお会いできるのは、明日の湯浴みの時。……それなのに私の胸にあるのは、姫に慈しんで頂いた高鳴りではなく、錯乱した手に乱暴された痛みだけなのです。ですからどうか、もう一度、私に触れて、愛して下さいませ」

「あ、愛？」

思わぬ単語に、和真の目がぎょっと剥かれてしまう。

錯乱していた事については弁明の余地もないが、だからといってそれ以前に触ってしまったのは、単なる事故（故意含む）であって愛からではない。

だ。

「姫……私にも、どうかお情けを」

「お、お情けって……どう考えても可笑しいだろ、それ。普通、男で断る奴なんていねえし」

ぼろり、本音が和真の口から零れたなら、ぱつと顔を明るくさせたアロマが「では！」と、期待に満ち満ちた目を向けてきた。

何がそんなに嬉しいのか、和真にはさっぱり理解できないものの、普通は無条件で触れないところを、望まれて触れるのは、色々とおいしい気がした。

（けど愛って……どうすりゃいいんだ？ さっきみたいにしたらいいのか？）

迷いながらも下向きになっているアロマの胸へ、手を伸ばしてみる和真。

しかし、アルエの胸を直に触っていたはずの左手ともども、腕が異様に重くなっているのを知っては、眉毛が怪訝に顰められていく。

「あ、れ？ 腕が、なんかすげー、重くなってんだけど」

するとこれをどう受け取ったのか、一瞬表情を曇らせたアロマ、続けざまに不敵な笑みを浮かべてきた。

「！」

女難の経験がそうさせたのだろう。

途端に、どことは言わないが、きゅっと縮む思いを抱いた和真は、アロマから遠ざかるように足を掻いていく。

「ひゃっ、姫、くすぐりたいですわ」

しかし、どれだけ後ろに進もうとしても、アルエの胸に頭が埋まるだけ。

乗じてアロマの笑みが黒みを帯びたものになっていけば、ブラウスの中で胸を肌蹴させた姿も、別のものに見えてきた。

たとえば、そう、神話等によくある、上半身は女の身体、下半身はヤバげな感じの

「姫……」

「な、何だ！？」

想像を逞しくしてしまつたのが間違いか、静かに呼ばただけでビクついた和真から、引っくり返つた返事が出てきた。

今にも涙ぐみそうなそれへ、アロマは少しだけ怪訝な顔をしたものの、再度微笑むと、境界線だと思われたアルエの腕をあつきり越えて、自身の胸を惜しげもなく和真の前に突きつけた。

「腕が動かないのでしたら、姫のお口で」

「……は」

（はい……？）

幻聴か？ それともそれに近い何かか？

今し方耳にした言葉が信じられず、正気を疑うような目でアロマを見上げれば、まるやかな房の間に嫣然とした表情を浮かべた彼女は、ほんのり頬を染めて言つた。

「姫のお口で私を慰めて下さいませ」

（ちよつ、おまつ！？ そ、それって女が言つて良い台詞か？）

経験なし、発想のレパートリーにしても少ない和真だが、アロマの台詞は確実に別の場面を連想させてきた。

側仕えの騎士に褒美を強請られ、下が駄目なら上で、と譲歩されて本気で悩む、真面目と馬鹿が紙一重の姫君
もしくは。

邪悪な魔法使いに攫われ、散々嬲られた挙句、これが出来たら解放する、という絶対嘘だろお前的な提案にすぎる姫君
みたいな。

（つて、どっちも姫の立場ないだろ、それ！ くそつ、何で巫女じゃなくて、姫つて事になつてんだよ、俺！ 巫女だったらまだ……つて、全然変わんねえし！ つーか、逆にヤベエ！！）

一度暴走を始めた思考は、ちよつとした単語に反応して、先程とは別の場面を和真に連想させる。

ベースは先程と大して変わらないものの、対峙する相手が人型以

外の異形ばかりとは何事か。

（しかも巫女装束とか、和服は駄目だ！ ツボ過ぎる！）

女が苦手なのであって、決して嫌いではない和真、実は和服女性にグツとくるタイプであつた。

洋服姿の女に絶望し続けた反動で、古き良き時代の大和撫子に、多大な幻想を抱き過ぎた結果だ。

そしてその結果は今、最悪の形で現れてしまう。

「……あら？」

最初にソレに気づいたのは、和真の唇に胸を近づけようとして、更に身体の距離を縮めてきたアロマ。

アルエの両腿に手を置いていた彼女は、少しだけ身を起こすと、探る視線を和真の身体に這わせて下降させていく。

「あ……ふふ」

何かに目を留めては、嬉しそうな顔を上げ、再び和真の顔へ裸の胸を近接させてきた。

それと同時に、意識したと思しき動きでくゆる腰が、アロマの察知した異変を和真に突いて知らせてくる。

（げっ、マジかよ。さっきまでは確かにきゅってなってたろ？ 妄想でこれって……）

迫られる状況と、柔らかく大きめな衣服が、ソレに対する和真自身の察知を遅らせていたようだ。

挑発的な動きをしても、口に出すことは憚られるらしく、薄っすら羞恥に頬を染めたアロマが、黒い部分のない、可愛い笑い顔をした。

理解に苦しむところではあるが、どうやら一向に触れてくれない和真が、それでも自分に反応していると感じ、喜んでいられるらしい。そんないいらしいアロマを前にして、不意に和真の心臓がドキッ

と高鳴った。

（け、けどよ、コイツの動作、可笑しくね？ 初対面の時は羞恥の塊みたいだったくせして…… ああでも、夢なら何でもありか）

後ろのアルエにしてみても、つつこみどころは多々あるが、全て夢で片付ければ納得がいく。

でなければ、この状況、この体勢は色々と無理があるだろう。

とはいえ。

初対面から過ごしてきた時間は、決して長くはないのに、ここまですっきりとした表情をしてくれるアロマ。

そして、浴場での扱いを忘れたように、今も和真を後ろから支え抱き続けているアルエ。

逃避しかけた目の前の課題を見つめ直した和真は、緊張に粘つく喉をぐくつと鳴らした。

（今までの俺の経験からいって つつっても、こんな状況は皆無だったが、とりあえずこれは畏だ。後ろの感触が許されるのも、目の前の膨らみが曝け出されているのも、俺が触るまで。触れた途端に変態呼ばわりされて、二人がかりでのぼせた身体をボコられるのは確実だ。確実なんだ。絶対なんだよ！ いやしかし）

和真の目が見つめるのは、自分の手形がついたままの、痛々しいアロマの左胸。

（……どの道、ボコられても仕方ないことしてんだよな、俺。だってらいつそ、畏に掛かってもいいか。どうせこれは、とびっきりの悪夢なんだから）

思うが早いか、唇を近づければ、「あっ」とアロマの声が小さく零れる。

照準から外れた尖りが口周りをくすぐるものの、和真が辿るのは、あくまで痛みを与えたと視認できる手形の範囲内。

「姫、舐めて、んひゃっ、他も、やっ、違っ」

要望通り舌を使えば滑らかな肌が揺れ逃げるものの、返ってくる場所が手形の外なら、頬で受けて逸らしていく。

「アロマばかりズルいですわ。私だって、アロマと同じですけど」「すると頭上から聞こえる、アルエのいじけ声。

視線だけを上向かせれば、そこには二つの同じ顔が、和真へ潤んだ瞳を向けており。

（まるで巨人に見下ろされているみたいだな。どっちも俺より身長はないはずなのに……って、あれ？）

前後から双子の胸責めを受けつつ、ぼんやりそんな事を思った和真だが、ここでまたしても朦朧としてくる意識を知った。

しかし今度の原因は、何と考えるまでもない。
いわゆる一つの

酸欠だった。

覗きは相手が誰でも犯罪です。

双子と別れ、湯殿を出た和真。

待っていたのは和真を湯殿に押し込んだ、口元に揃えた指を押し当て「ぐふふふ」と笑う長と、相変わらずちぐはぐな感じのする甲冑の二人だった。

「……んだよ、じーさん。つーか、今までここにいたのか、あんたら？」

ややぐったり気味の身体を壁へ預けながら問えば、癪に障る笑い姿のまま、長が首を振って答える。

「いやいや。まさかまさか。そんな野暮な事はできませぬよ、なあ？」

「……………」

長がやらしい目で目配せしても、甲冑は微動だにせず。

それでも構わない長は、一人で「そうじゃろうそうじゃろう」と頷くと、今一度、和真へ向けて「ぐふふ」と笑った。

「ワシらは姫が長湯をされている間、近くの小部屋にて待機しておりました。いやあ、大変でしたなあ？ のぼせてしまっわ、酸欠で倒れるわ」

「おい、何でんなこと知って……」

訳知り顔の長に青筋を立てた和真。

しかし、自分が気を失っている内にあの二人が報告したのかもしれない、との考えに行き当たれば、気まずい顔を逸らすに留めた。何せ自分には、この悪夢内の設定で姫という付加価値がついているのだ。

のぼせたり酸欠したりすれば、今までの話の流れから、召喚の総合責任者っぽい目の前のジジイに報告するのは当然だろう。

夢から悪夢へ。

完全にシフトさせた和真はそう判じ、対するジジイこと長はそん

な彼をあざ笑う顔で、枯れた胸を大きく逸らして言った。

「それは勿論、覗いておりましたからな！」

「……………」

長ことジジイの言葉を理解するまで、数秒　　後。
「ほぐあっ!？」

壁に身体を預けつつ、問答無用で緑の物体を蹴りつけた和真は、尻餅をついた頭へくらくらする額を押し付けた。

「い、痛いですじゃ、姫！　グリグリはお止め下され！　ワシの、ワシの残り少ない頭髮がっ！」

「あーもー、うるせー。頭が重いんだから仕方ねえだろ？　つーか、安心しろ。さっきあんたが盛大に倒れた時、ずり落ちた帽子の中身は綺麗につるつるだったからよ。それ以上減りようがねえ　　つて、そんなことよりだっ……………」

二度の気絶を経て、すっかりだるくなってしまった身体は、相手にも自分にも大声を許さない。

それでも高ぶった気持ちから、凄みのある目でジジイを睨みつけた和真は、う　こ座りの膝に頭より重い両手を預けつつ、額をグリグリ押し付けていく。

「覗いてたつてのは、いただけねえな、ああ？　どこで、どうやって、どんなふうにして覗いたつて？　とつと吐かねえと、この、ふっさふさの眉毛を片っ端から抜いてくぞ」

「おお、お止め下され！　眉毛を失くしたら、ワシは、ワシは……特にどうともありませんが」

「あの双子は知ってんのか？　てめえがこの眉毛の下で、どんな目で覗いていたのかをよ？」

「ひ、姫……若干性格変わっていませんか？」

ジジイの長い眉毛を抓んで引つ張る和真は、眉毛下の余計な声を一切認めず、少しばかり血走った視線を注ぎ続ける。

これにビクビクしていたジジイ、さすがにふざけ続けるのは不味いと思ったのか、嘆息すると首を縦に振った。

「……ええ。双子は知っておりましたとも。いえ、あの双子こそが、覗き穴と申しますか、何と申しますか」

「知っていた……そうか」

双子公認の覗きだと聞き、ふらつと離れる和真。

再び壁に背中を預けると、埃を払いつつ立ち上がった長へ、億劫そうに質問を重ねた。

「アイツらが知ってんなら、まだ良いとしても。アイツらが覗き穴つてのは？」

「はあ。それはロドフィーク・ラダドリシユア姉妹の目にございます。あの双子の目には特殊な魔法を掛けておりまして、湯殿での姫の行動は」

「ろどふいー……？ 何だそれ？ アイツらの苗字か？」

「はい、然ようにございます……じゃ？ と、お尋ねになられると、いうことは、もしかあの二人、姫に挨拶もなく？」

眉毛の下に隠されているため、詳しい表情は判らないものの、きょとんとした様子で長が問うてくる。

どうやら長の覗きは、視力に頼っただけのものらしい。

和真はこれへ「いや」と前置くと、アロマとアルエ、二人の名を紡ぐべく口を開きかけた。

すると。

「ほひはああああああああああっ！！」

「っ！？ るせっ……」

突如、素っ頓狂な声を上げ、その場で飛び跳ね出した長。

頭どころか全身に響く大音量を受け、和真が顔を顰めたなら、興奮状態の長がぶんぶん首を横に振ってきた。

「も、申し訳ございませぬが、それだけは勘弁して下さい！」

「それだけって……二人の名前のことか？」

見事な慌てっぷりに推測した事柄が和真の口を出、今度は縦にぶ

んぶん首を振った長は、どんな時でも離さない杖でトンツと床を突いた。

「勿の論にございますじゃ！ ロドフィーク・ラダドリシユア姉妹がロドフィーク・ラダドリシユア以外の名を口にしたということはっ！」

「いうことは？」

「ロドフィーク・ラダドリシユア姉妹が、姫にその名をお許しになったということなのですじゃー！」

「ばーんっ、と後ろに効果音が張り出されそうな勢いで、長がもう一度床を突いた。」

しかし

「……………だから？」

和真にはいまいち伝わるものがなく、浮かぶのは怪訝な顔のみ。

これへ「ふむ」と我に返った様子でヒゲ ではなく、眉毛の先を擦った長は、はしやぎ過ぎた反省をするように、杖で自分の頭をぽりぽり掻いた。

「確かに。姫の反応は至極当然ですな。 ロドフィーク・ラダドリシユア姉妹 アロマとアルエ、二人の名前はワシの知るところでもございます。先程のはその、言うなれば迷信なのです」

「迷信？」

「ええ。リジレイシカに古くから伝わる迷信……女から名を許された男は、その女のいないところで、他の男より先にその女の名を告げてはならない。もし告げたなら、その女は風霊かざれい・シエンナデルテにかどわかされ、二度と男の前には現れなくなる、という」

「へえ？」

これまでの長の言動から、迷信に振り回されるタイプではない、逆に迷信すら振り回してしまいそうだと思っただが、違うらしい。

（案外繊細なんだな、じーさん）

和真が意外だと目を見張ったなら、また杖を突いた長が、中断し

ていた覗き話を再開させた。

「それは兎も角として。双子の目を通して姫の行動を視ていたのは、不測の事態に備えるため。やましい気持ちは一切ございません。それが証拠に、双子の目を通していながらも、映す姿は姫だけに絞っておりまして。これなる兵士も視ておりましたので、ワシをお疑いにならないのであれば是非、この兵士にも確認して頂きたい」

「……………」

長が杖を向ければ、それまで直立不動だった甲冑が、ぎこちない動きで頷いてきた。

「って言われてもなあ。コイツには助けられた覚えはあっても、そちの面で信用できるかって言ったら、正直判んねえし。……いや、そもそもアイツらの裸見てる俺が、とやかく言える立場でもないよな。あの双子が覗かれてるって判ってたなら尚更だ」

反応を待つ長と甲冑を前にしてそんな結論に達したなら、和真は幾らかマシになった頭を壁から離すと、ふらふらした背を伸ばして溜息をついた。

「ふう。判ったよ。あんたらの覗きは俺の行動を監視するためであつて、双子の、女の裸目当てじゃないって。……勘違いして悪かったな」

最後の謝罪は、具合悪さも手伝って、先程より理不尽に接してしまつた長へ向けて。

すると長は広い心を示すように、「いやいや」と笑い混じりに手を振った。

そして間髪入れずに言った。

「裸目当ては勘違いではありませんねぞ？ 尤も、対象はあの双子でございせんが」

「……………」

長の言葉が指し示す「対象」とは誰か。

即座に理解し、否定したい和真へ、長は更なる言葉を重ねてきた。春のほがらかな笑みから一転、クセ者紛いの黒い笑顔を貼り付けて。

「いやー、身体つきは軟弱でしたが、なかなかどうして、いやはや立派なモノをお持ちで。そのひよろさで、まさかりジェレイシカでの平均よりやや大きめとは思いませんだわ。ワシヤてつきり、シガレットが良いところだとばかり」

その後の長の言葉が続かなかったのは、言うまでもない。

ホントのところ その1

どれだけ無体な仕打ちを受けようとも、次の瞬間にはぴんぴんしている、永遠の起き上がり小法師こと長。

タネを明かせば、こんなでも一応リジェレイシカ屈指の術師、すかんぴんの魔力の、ないに等しい絞りカスでも、和真ぐらいの暴力は防げる結界を張っているらしい。

その割には「ぴぎゃっ」だの「うぎよろっ」だの、妙な悲鳴を上げては苦痛に呻いているのだが。

とはいえ、元々だるかった身体で暴拳に出た和真が息を切らす頃には、長はけろりとした表情で先頭に立ち、湯殿へ向う時に使ったのとは違う廊下を杖で指してきた。

「さて。それでは参りましょうぞ、姫。いざゆかん、めくるめく官能の世界へ！」

（このジジイ……何だってこんなに、無駄に元気なんだ？）

ぜえはあ、肩で息をしつつ、折角流した　　というか流された背中
中に疲労の汗を滲ませた和真は、再び壁に身体を押し付けながら、
小躍りでもしそうな緑のジジイを睨みつけた。

（つーか、俺の腕も、何で動かない？）

蹴り転がしたり、頭突きをかましたり、思いつく限りの攻撃をジジイに試みたが、和真の腕は動きに合わせて振ることはできても、自分から動かこうとはしなかった。

特に右腕が酷い。

少しずつ整えられる息に、和真の中で腕への疑問が膨らんでいけば、くるりとこちらを向いたジジイが、「むふふ」とまたしてもいやらしい笑いをしてきた。

「とはいえ、姫はもう、堪能しておりましたなあ？」

「ああ？」

「ロドフィーク・ラダドリシユア姉妹にございますことですじゃよ！ 前後に左右に上下、隈なく双子に埋め尽くされていたではありませぬか」

「……………」

改めて思い出す、湯殿での自分。

女が苦手と言いつつ、実際怯えながらも、触れたり、揉んだり、舐めたりした感覚は、和真に押し黙ることを強要してきた。

恥ずかしい。穴があったら入りたい気分だ。

もしも、これをそのまま口にしたなら「おお、それはそれは。何とタイムリーな。穴ならほら、この先に四つ、いや、姫さえ望めばその三倍はありますぞ！」と、長がナチュラルに下ネタに走るの明らか。

ゆえにからかう声音には、溜息を使って応えた和真。

ついでに付き合っていていられないと、壁伝いに歩みを進めれば、ふと引つ掛りを覚えて長に尋ねた。

「前後に上下つてのは、まあ、いいけどよ……左右つてのは？」

「おや？ 憶えておられない？ 双子を強引に脱衣所へ戻されたではありませぬか。だからこそ、腕が動かぬのでしょうか？」

「腕……そうか、それで重く」

和真がようやく合点がいったと領けば、訳知り顔で長が領いた。

「然様。いわゆる、火事場の馬鹿力、というヤツですな。あれは人間が本来出して良い範囲にない力を、一時放出するわけですから、どうしたって疲労等の反動は大きくなるのでしょう」

しみじみした長の語りを聞き、「へえ」と和真は声を上げた。

（このじーさん、難点はあるが、やっぱり長と呼ばれるだけあって、洞察力は鋭いんだな）

そう、和真が感心したのも束の間。

「それにしても、湯殿の全てに媚薬が使われていたというのに、気軽に手を出せないほど、女へ苦手意識をお持ちとは。ロドフィーク・

ラダドリシユア姉妹にも予め惚れ薬を仕込んでおりましたが、ほとんど無駄でしたな」

「おいこらちよい待てこのジジイ」

女嫌いではなく、苦手と判じた洞察力はさすがだった。
だがしかし。

「はて？ 何か姫を怒らせることをしましたか？」

惚けているというよりは、本気で判っていない首の傾げっぷりに、長の進行方向へと立ち塞がった和真は頭の痛い顔をした。

「び、媚薬に惚れ薬だと？ 何だつてそんなもん！」

「はあ。それは勿論、事をスムーズに運ぶためですとも。萎縮している姫を奮い立たせ、手始めに二人をお手つきして頂く為」

「だから、何でだ！？ 百歩譲つて、媚薬は判るとしても、だ。お手つきだの、ほ、惚れ薬なんてっ！」

「これは異なことを申される。あの双子をお気遣い為さる姫ともあるうお方が、お判りになられませんか？」

「何を」

「失礼ながら、いえ、当然の事ながら、ワシらは姫をよく存じませぬ。我が妻により使用可のお墨付きを頂いた媚薬とはいえ、高ぶった姫がどんな行動に出られるのかさえ判らぬのです。抑えられぬ猛りをぶつける場所が必要でありましょう。そしてその相手となる娘に求められるのは、姫に殉ずる愛」

「だからって、それなら最初っから、媚薬を使わなきゃいいだけの話じゃねえか！ 二人だつてあんな格好で俺の 姫の世話をする必要はないはずだろ！？」

「……はあ」

和真が理解できないと声高に叫べば、恐ろしく静かな溜息を吐いた長は、ふざける口調もなく言った。

それまでのひょうきんさを打ち消す、厳かな雰囲気を纏いながら。
「異世界から訪いし春告の姫よ……恐れながら、貴方は酷い勘違い

を為されている」

「勘違い、だと？」

「然り。我が言により少なからず語弊が生じた事は認めましょう。しかしそれは、無作為に選ばれた姫が、無用の責を自ら負われぬ為先に申しました四人を貫く法、それが伴う重責まで、姫に与えてはならぬゆえに。……姫におかれましては、法を達成することにのみ、尽力して頂きたかった」

再び溜息をついた長、しかしそれは極度の疲労を感じさせるほど深い。

転じて長は口元に笑みを浮かべると、眉毛を八の字にして続けた。
「此度の姫は些かお節介ですのお。否、お優しいというべきか。四人の女を自由にしていいと言われれば、大抵の男は喜ぶでしょうに、姫はまず女を案じ、これを厭われる。誰ぞ意中の方がおいでかな？」
「いや全く。単に周りにいる女が録でもない奴らだったただけだ。アロマとアルエ……あの二人みたいのばっかだったら、俺も他の奴らと大差なかったんだろうけど」

（つつつても、あの二人のアレも、惚れ薬のせいだったんだよな。段々大胆になって可笑しいとは思っていたし、それなら納得できるが……なんだか、夢を壊された気分だ。いや、勿論これは悪夢には違いないんだが）

世辞とも取れる長の言葉に軽く応えた和真は、その反面で、思った以上に落胆している自分を知った。

甲斐甲斐しい双子へ不用意にドキドキしてしまったのが、余計に拍車を掛けていた。

和真はそんな思いを首振りにて払うと、「で？」と話を元に戻すことを要求した。

「俺がしている勘違い、姫には無用の責ってのは何だ？」

「それは……」

言いかけた長は、止めていた歩みを再開すると、和真を追い越して先を歩き始める。

語りを止めたというよりも、歩きながらも話せるだろうと言いたげな背中。

和真はこれを追いかけて、身体の向きを立ちはだかる位置から、歩き出す方へと変えた。

「うおっ!？」

しかし、幾らかマシになっても本調子ではない身体に加え、履き慣れないサンダルのような靴、裾を引き摺るゆったりした衣に、バランスを崩してしまう。

と、その身体を掬い上げるようにして、控えていた甲冑が和真の左腕を下から担いできた。

「わ、悪い……ありがとう」

「……………」

礼を言えば、無言で振られる頭。

距離が縮まっても、甲冑の重さに息を切れさせない相手は、和真に肩を貸したまま歩き始めた。

このまま支えていてくれるらしい。

（どうせなら、もっと早くやって欲しかった……いや、それは贅沢か）

頭を振って自分の中の甘えを取り除いた和真は、もう一度、甲冑に向って言った。

「すまねえ、助かる」

「……いえ」

すると返ってきたのは、くぐもった声。

幼くも感じられるそれに少しだけ目を見張った和真は、ふっと小さく笑うと、そろそろ話を再開し出すであろう長へ視線を投じた。

ホントのところ その2

和真と甲冑が足並み揃えて続くのを見計らい、長は前を向いたまま語り始めた。

「この世界へ望まず召喚された異世界の姫よ。貴方にこのような事を申しては、甚だ不愉快に思われるかもしれませぬが……我らもできることなら、異世界などから何者とも知れぬ男を招きとうなかつた」

「……………」

「特に、他四人の姫に身内がある者なら、誰もがそう思うでしょう」「それって……じーさん、あんたが？」

和真の問いに長はふつと笑う気配だけを寄越した。

「判りますかな、姫？ 遙かな昔の責を今なお取らされる者の身が、真に憤りをぶつけるべき相手はもういない。その血筋はあっても、彼の血を粛清せし系譜の先を、どうして責められようか。異世界の男においても然り。彼らはただ勝手に望まれ、役目を果たしただけ……稀にこれを逆手に取り、自由に振舞う者は知りませぬが」

「……………」

何やら薄ら寒い雰囲気、和真がぐつと顎を引いた。

逆手に取った憶えも、自由に振舞った憶えもないが、これはきつと、遠回しに忠告しているのだろう。

勝手な振る舞いをすれば命の保障はない、と。

（か、考えてみりゃ、一夜に四人の女を、っただけで完遂した暁にはバツサリ、なんて事もあり得るんだよな。優遇にしたって、はいそれまで、だろ……な、なかなかシビアじゃねえか。さすがは悪夢）
何が何でも、どれだけ目覚めが遅くとも、まだまだ夢だと思っている いや、思いたい和真は、乾いた笑いで頬が引き攣るのを感じた。

「そ、それが俺の勘違い？」

大きく間を開けてからの問いかけは、和真の声の震えと弱弱しさを隠せない。

ある意味、遠回しの死刑宣告を受けたも同然なのだから、仕方がないと言える。

だが、長はこれに首を振ると、小さく溜息をついて言った。

「いやいや。これは単なる愚痴ですじゃ。孫娘を差し出さねばならなんだ、情けないジジイの愚痴……」

（孫娘……そう、か。じゃあやっぱり……………ん？
待てよ？）

危うくお涙頂戴というか、申し訳ない気分で終わるところだった和真は、何かとてつもなく大事なことを忘れている気がして眉間に皺を寄せた。

（じーさんの孫娘、じーさんの孫娘　　）

あともう少し、あと少しで何かが判りかける、その時。

「そうそう、ちなみにあの双子はワシの娘でしてな」

何故か朗らかに別の、かなり無理のある話を持ってきたジジイ。

「は？　娘？　孫じゃなくて？」

思わず判りかけたことを手放し、驚くのに専念してしまった和真へ、肩越しに振り返った長は「むふふ」と頷いてみせた。

「娘、ですじゃ。何も驚くことはありませんまい」

「いや驚くだろ、普通。じーさんから、あんな……ああ、いや、何でもない」

「あんな、何ですかな？　そこまで言いかけて、何でもない、で済ますこともありますまい。特に親としては非常に気になる」

「うっ」

長い眉毛に埋没した目が、きらつと光ったようにみえた。

聞く気満々の突き刺さる視線に呻いた和真は、少しだけ目を逸らすと、早口に言った。

「可愛いって言おうとしたんだよ。じーさんみてえな妖怪から、あんなのが二人も揃って出てくるわけねえって!!」

「ほっほっほ。照れ隠しとはかわゆいですな、姫。……にしても妖怪とは。酷いですな。こんなお茶目な紳士を前にして」

「お茶目が過ぎるから妖怪なんだろう？ 大体、紳士って何だ、紳士って。つーか、じーさん。あんたよお、孫娘だけでもアレだったのに、何で関係ない双子の娘まで異世界の男なんか差し出してんだよ」

「ほっほっほ」

「笑うトコ違うだろ!」

答える気がないのか、それとも当の異世界の男に、自分の胸中を明かしたくないだけなのか。

判別しない笑いを残し、再び前を向いた長は、かんっと杖を打ち鳴らすと、和真の意識を話の中に引き摺り込んでいく。

「さて、話を本題に戻しますぞ。先程から述べております姫の勘違いですが、それはつまり、一夜にして四人を貫く、という意に関して」

「はあ？ それこそ勘違いしようがねえじゃねえか。女と交われてんだろ？ 俺に出来るかどうかは別としても」

「はい、そこっ!!」

「うおっ!？」

突如、ぶんつと風を切ってきた杖が、和真の鼻先に突きつけられた。

和真に肩を貸す甲冑が止まってくれたお陰で、衝突は免れたものの、あと少し前に出ていたら、確実に昏倒、打ち所次第では二度と目覚めぬ眠りに突入するところだった。

早鐘を打つ心臓に息を詰まらせつつ、甲冑への礼もそこそこに、長を睨みつけた和真が吠える。

「何すんだ、このジジイ！ 危ねえだろ!？」

しかし啖呵を切られた長も負けてはいない。

凶器になりかけた杖を更に和真へ肉薄させると、肩を怒らせるようにして言った。

「じゃかしやあ、この若造めが！ 青臭いペーパーのくせに、なあに上から目線で語つとる！ よいか？ お主の勘違いとは、そこじやそこー！」

つんつんと杖で鼻を軽く突いた長は、売り言葉の買言葉に驚き、それでも口を開こうとした和真を遮るように、一転、静かな声で言った。

ともすれば、疲労さえ滲む、そんな声音で。

「あんな、ちいと考えてみてはくれんかの？ そもそも、何故ワシらが異世界の男を招くのか。そうすれば、本来なら語らなくて良い内実を何故お主に語って聞かせているのか、その理由も判るはずじやぞ？」

引いた杖で肩を叩きつつ、向かい合った長が呆れ気味に眉を上げた。

和真の胸より低い背からの上から目線には、些かムツとしないでもないが、どれだけふざけようとも相手は長と呼ばれる存在。

どつき回せたせいで、和真からの評価はかなり低いものの、和真を「若造」「青臭いペーパー」と言えるくらい、長い時を歩んできているのだ。

言いなりになるのは、甚だ癪だったとしても。

「……あんたたちが召喚すんのは、呪いを百年間無効にするため」和真なりに長が指摘したい部分を考えつつ、召喚理由を口に出すすると長は「そう！」と大きく頷いて後、コホンと咳払いして杖を納めた。

「熱くなってしまったとはいえ、度重なる姫への非礼、どうぞお許し下され」

てつきり頷いた先を言うのかと思いきや、いきなりの謝罪に和真は面食らった顔をした。

（別にどっちでも変わんねえと思うんだが……よく判んねえな、こ

のじーさん)

対処に困った和真が「ああ」と投げやりに答えれば、深々下げた頭を上げた長、杖をトンツと床に突き、何度も頷きながら言う。

「そう、我らが異世界から男を招くは、呪いを百年間無効にするため。それもリジェレイシカ全体における お判り頂けますかな、姫？ 異世界の姫にとってはただの工口だったとしても、我々にとつては死活問題。出来れば、で済む話ではないのです。して貰わなければならぬ。だからこそ、四人の姫も、その家族でさえも、姫とのコトを容認している。本来であれば忌避する惚れ薬さえ用いる。手段なぞ選んでおられぬのです」

「……………」

言葉もなかった。

確かに、自分は勘違いしていたと和真は思った。

長から話は聞いていたはずなのに、まともに聞いてはいなかったと思い知った。

(夢だから、なんて屁理屈だよな。夢だったとしても、もう少し考えてみれば良かったんだから)

為す事ばかりが自分の中で強調されてしまい、蔑ろになっていた本当の、彼らの理由。

和真は手段であつて、目的ではない。

だがしかし。

「だからって、俺が容認できるかよ」

話は判った。

勘違いしていた部分も判った。

かといって、和真の事情が何かしら変わるわけでもないのだ。

「そもそも経験すらないのに、一夜に四人も、どうしろと？」

キス一つ満足に済ませていない身に、何が出来るというのか。

(……風呂場でのアレは、まあ、置いといて)

瞬間、浮かんだ双子の裸体と感触に少しばかり顔を赤くしたなら、
「え……？」と漏れる声。

しかも長からではなく、何故か耳元で。

目を丸くして左隣を見やれば、甲冑の真正面どアップが出迎える。
迫力のあるそれに固まってしまった和真だが、ふと考えれば漏れた声の意味もすんなり理解できた。

（そっか、そうだよな。コイツだって俺が姫……って自分で言うのも段々慣れてきて、心底どうかと思うが。兎に角、呪いをさっさとどうにかできると思って、こうやって肩まで貸してくれているのに。つか、この反応。好きな奴でもいるってか？ それとも既に彼女持ち……）

野次る気持ちは全くないが、彼女ナシで見知らぬ女の下へ向わねばならない自分を思うと、何かム力つく。

世界の危機は一先ず置いておき、暫定彼女持ちの甲冑に冷笑した和真は、力の戻ってきた左腕で彼の頭を締めると、皮肉混じりに言った。

「んだよ。女経験皆無で悪いが、この種馬が。てめえらみてえに、見境なくバコバコやってるのが格好良いと思ったら大間違いだ。そういうのはな、だらしないって言うんだよ、クソが。複数人同時に孕ませて、訴えられちまえ、色男」

今まさに、自分がその「種馬」で「見境なくバコバコ」しなければならぬ「クソ」の「色男（？）」になろうとしている事実から目を背け、言い切った和真は、甲冑の頭を解放すると同時に離れていった。

ム力ついたからではない。

ム力ついて、それをそのまま口に出した手前、甲冑の肩を借りるのは物凄い罪悪感を招くのだ。

しかも甲冑が彼女持ちなのは暫定、それも単なる和真の思い込みでしかない。

「もついい。身体もだいぶ良くなったからな。今まで支えてくれて

ありがとう」

だからこそ、投げやり気味にはあるが、一応礼を述べた和真は、完全に回復したわけではない身体をよろめかせつつ、長の方を向こうとし。

「お、おい？ もういいって」

だというのに、またしても和真を支えようとする甲冑の動きに、ぎょっとして身を捻る。

何を言われようと、あくまで任務に忠実に生きようというのか。ありがた迷惑な甲冑に、罪悪感を引き摺ったままの和真は逃れるべく、腕を払い。

「うえ？」

拍子に甲冑の兜が地に落ちれば、さらりと流れた金の光に、和真の目が点になった。

雷神登場

素顔が露になったせい、その場で甲冑を脱ぎだした元・甲冑は、「ふう」と息をつく、汗に張り付いた髪の毛をぐしゃぐしゃ梳かしながら、手甲のないそのたおやかな手を長に向けて言った。

「すまぬが長、何か拭く物を頼む」

よく通るその声は、滑らかでいて染み入るように甘く、それでいて並の男には決して出せない高い音階。

目を極限まで見開いて、彼の人物を捉えて離さない和真に対し、ひぎひぎ変な笑いの堪え方をした長は、どこからともなく取り出したタオルを元・甲冑へ差し出した。

これを受け取った元・甲冑は、頭と露出している肌を荒々しく拭くと、最後にタンクトップの中へタオルごと手をつ込んで弄り、汗を取り除いていく。

その度、タンクトップの内側を歪にするソレは

「長よ、助かった」

「雷公姫……そこでワシに使用済みタオルを渡されても。首に巻いておけば良いではありませんか」

ぐしょ濡れになったタオルを、さも当然のように押し付けられた長は、元・甲冑の容姿を見ておきながら嫌そうな顔を見ると、口調まで変えて彼女を呼んだ。

そう、甲冑の中身は女、それも凄絶な美貌の持ち主であった。

どこに隠していたんだとつつこみたくなるほど、豊かに波打つ長い髪はけぶるような金。

甲冑に包まれていたせいだろう、仄かに上気した白い頬には、そばかすの類が一切見当たらない。

光に濡れた睫が縁取るのは、強い意志を感じさせる紫の瞳。

形の良い鼻の下には俄かに笑んだ薄紅の唇があり、高飛車や傲慢といった印象を抱くものの、これがまた彼女の容姿にはとてもよく似合っていた。

そんな元・甲冑　雷公姫は、長の非難に目を細めると「ふんつ」と鼻で笑った。

「何を言う。私はこれから春告の君に肩を貸さねばならんのだ。そんな薄汚い濡れタオルなぞ、首に掛けておける訳がないだろう?」

「う、薄汚い……それを判っていて、ワシに託すと?」

あんまりな扱いに長がほと困った顔をすれば、腕を組んで見下す雷公姫が言った。

「好きだろ、こういう扱い」

「……え、じーさん、そういう趣味の奴?」

聞き捨てならない雷公姫の言葉。

これに我を取り戻した和真が一步引けば、長が慌てた様子で首をぶんぶん振ってきた。

「いやいやまさか!　ワシとて誰でも良い訳ではありません!　無碍に扱われて嬉しいのは我が妻たるあの人まで!　だというのに皆、ワシの性癖を変に勘違いして」

「否定は、しないんだな?」

「あ、ですが、姫もなかなかどうして、ワシを虐める才がかなりのようです」

「……だから俺が何しても、そこに異議はなかったってか」

遅れて知った、ぞつとする真事実。

大いに一步、長から後退すれば、和真と長のやり取りを完全に無視した雷公姫が、二人の間に流れる絶妙な空気を掻き消す明るさで言う。

「そうそう、長よ。この甲冑も片付けておいてくれ。我が家の宝物庫にそれらしく置いてあった年代物だが、見ての通り重い動きにくいわ、換金する価値もないクズ鉄だわで、身分を隠すしか能がない。棄ててくれても私は構わんが……父や祖父が煩くてな」

「つまりは棄てたら最後、ワシに全責任を擦り付けるおつもりですな？」

「頼むぞ」

いつそ清々しいくらい爽やかに、長のジト目を受け流した雷公姫は、そんな過去をさっさと視野外に置くと、和真に向って穏やかに微笑んだ。

「春告の君よ。私が色男でなくて不服か？」

「……………!!」

雷公姫の紫の瞳に自分の姿が映った途端、再び全身を固まらせた和真は、首が千切れそうなほどぶんぶん横に頭を振った。

そうして雷公姫が一步近づけば、大またでその二歩以上後退した。「春告の君？」

和真のこの様子に不思議そうな顔をした雷公姫だが、止まる気はないらしく、どんどん近づいてくる。

途中で和真の頭が壁を打ち、後退できなくなっても、彼女の接近は留まるところを知らず。

ほぼ同じ目線が至近まで迫るのを見計らい、これ以上は不味いと和真は両手を前に翳した。

「ちよつ、ストツ　ぷにゅ？」

「ひゃっ!？」

手の平に納まる、少しばかり硬いソレ。

擬音を口にした割に、何であるか、の理解を忘れた和真は、硬さを解すように揉み揉み。

すると。

「いつ、いやああああああああああっ!!」

「ぐほへあ!？」

思いつきり振り被られた雷公姫の拳が、顔面を狙って襲い掛かってきた。

モーション自体は某幼馴染の速度に劣るものの、光を纏って輝く現実離れたエフェクトはヤバイ。

すかさず、不意打ちにより鍛えられた反射神経で、壁伝いにしゃがみ込めば、ズドンツと後ろに下がった頭。

何なんだと考える前に、ぱらぱら落ちてくる破片を捉え、ぱつと顔を上げた和真は、そこに見てはならないへこみを認めてしまう。

光が収束した雷公姫の拳を中心に、半径五十センチの円を描いて陥没した壁。

（さ、さすがに明日香でもコレはない……）

おいおいどこの少年漫画だこりゃ？ と乾いた笑いが、和真の口角を震えさせる。

と、そんな和真を上から見下ろす紫の瞳が、自分の影の中で光るのが見えた。

思わずギクリと顔を強張らせたなら、拳をぐりつと壁に押し付けた雷公姫が、今にも泣きそうな声で言った。

「我が君……お願い致します、お手を」

「お手？ てえっ!？」

言われて気づくのも間抜けな話だが、ようやく視界に自分の両手を認識した和真は、その手が雷公姫の両胸を下から鷲掴んでいるのを目撃した。

驚きのあまり、ついつい揉んでみれば「いあっ」と悶えた雷公姫が、潤み責める視線を送ってくる。

「わ、悪い……」

和真はゆっくり手を離して謝罪すると、ぎくしゃくした動きで雷公姫の横から這い出、立ち上がったては拳が引いていくのを尻目に、温もりの残る手をにぎにぎ動かして見た。

（小振りだ……小振りだった……。アロマとアルエのを先に触っちゃったせいで、最初は判んなかったけど、確かにアレは胸だ。しかもただ柔らかいだけじゃなく、引き締まっているってーか）

「どーせ私の胸は小さいさ」

「……へ？」

ぽつりと零される、力のない呟き。

反し、ぞくりとした悪寒を感じた和真は、俯き加減でまたしても光る拳を震わせる雷公姫の姿を見た。

（ヤバい。反応はアロマやアルエと違って、とても正しいと言えるが……喰らったら確実に死ぬ拳だぞ、アレ！　そ、そうだ、こういう時にこそじーさん、長が何とかして）

迫る死の予感に、和真の目が雷公姫を視界に入れつつ、長の姿を探す。

程なく見つかる緑の長衣は、しかし。

（……何やってんだ、あのジジイ。こちらら絶体絶命のピンチだったのに、悠長に甲冑持ち上げようとしてんじゃねえよ！　こっち向け、ジジイ！　デカイ音がしてただろ　って、あ）

その時、和真は確かに聞いた。

他の音になどかまけている猶予はないというのに。

不自然な格好で固まった長、その腰がピキキツと嫌な音を上げるのを。

（……よし、自分で何とかしよう）

自業自得だとか、年寄りの冷や水とか言わないし、思わない。

だから腰を痛めた矢先、こちらに助けを求めようとする長の眉毛を、ささつと視界から遠ざけても、自分には何ら関係のないことだ。

長には長の、和真には和真の戦いがある。

長は和真のピンチを後ろに、せっせと甲冑を運ぼうとしていたのだ。

ならば和真も、長のピンチを死角に、自分の身を守って良いはずだ。

雷神様の割と大きくて、ちっさい悩み

雷公姫に全神経を集中させた和真。

とりあえず腕力で抑えるのは無理だ、と女相手に男として少々、いや、かなり情けない即断をした彼は、自分の直感を信じて両手を挙げた。

勿論、応戦するためではない。

降参の意思を示すためである。

気分は猛獣と絡まなくては明日がない、若干飽きられ気味のお笑い芸人といったところか。

「まあ何だ。と、とにかく、落ち着こう」

頼りない笑みを顔に貼り付け、自分は敵ではないですよー、と必死にアピールしてみる。

「私は十分落ち着いている……胸が小さくたつてっつー!」

効果は抜群だった 逆の方向に。

雷公姫がぐつと拳を握り締めれば、更に増していく危険な金の光（ら、雷公……って確か、かみなり様って意味だったよな。なるほど、言い得て妙じゃねえか。つーか凄えな、ジジイの翻訳魔法。文字まで勝手に頭の中で変換していやがる）

さつきより格段に近くなった死の気配に、どうでもいいことを思った和真は、逃避しがちな頭を勢い良く振ると、しっかりしろ俺！と自分を叱咤する。

反面、このまま殴り飛ばされれば夢から醒められるかも、という淡い期待が脳裏を過ぎってしまった。

この期に及んで、いや、こんなファンタジックでエキサイティングな展開が目のあるからこそ、夢であって欲しい和真、それでも葛藤は続き。

（しかしよ。もしも、もしも仮にこれが本当に現実だとしたら……間違いない死ぬよな、俺。で、だ。もし夢だったとしても、こんだ

け現実味のある夢なら、全く痛くないってのも無理な相談じゃね？）
過去、夢で自分の頬を抓った憶えのある和真は、それが普通に痛かったことを思い出していた。

脈絡もなく高いところから落ちる時には、必ずといって良いほど目覚めが訪れ、もしくは視点が急に別の場所に移っている。

それは傷つく場面だったとしても変わらず。

（そうだよ。さっきあの怖い奴に刃を当てられた時だって、嫌な感じがしたじゃないか）

脳裏に過ぎる、「ひひっ」と笑う不気味な老人の、刃を持つ姿。
ひやつとする怖気に、和真は再び胸に恐れを抱くと、そこを軽く握り締めて唾を飲み込んだ。

（痛かったから夢じゃない、なんて思いたくもないが、どっちにしろ、喰らえばひとたまりもない事に変わりはない）

夢か現実かよりも、生きるか死ぬかの瀬戸際。

そう思い定めた和真は、けぶる金髪の中に暗い顔を隠した雷公姫へ、もう一度声を掛けてみた。

死ぬのも痛いのも御免だ、そんな感情に背景付けられた最初の第一声は。

「ち、小さかったら駄目なのか？」

（何言ってるの、俺！？）

いきなりストレートに、相手が問題としている部分を否定しに掛かった自分。

頭を抱えて壁にぶつける、または即座に訂正を加えたいところだったが、金の鬘りの中から紫の瞳が覗くのは見ては、もう遅いと知った。

「貴方に……最初から胸のない男に何が判る」

（ご尤も！）

低い声に滲む苦悩。

即座に首を縦に振って賛同したい和真だったが、そんなことをすれば命はない。

和真は背後にびっしり冷や汗を掻きつつ、持てる気力の全てで声の変化を抑えると、至極真面目そうに言った。

「いや、俺には」

「ふん。判る、とても申されるか？ 平均より大きめだという貴方に。小さい者の気持ちなどっ」

「……………」

被せられた雷公姫の言葉に、押し黙ってしまった和真。

そうだよな、俺には判るはずもない など思ったからではない。

（………… そうだ、そうだよ。この女はジジイと一緒に、人の裸を無断で見やがって）

甲冑が女だったという衝撃ですっかり抜け落ちていたが、ジジイは確かに言っていた。

これなる兵士も視ていた、と。

そして甲冑 雷公姫もぎこちなくではあるが、頷いていたのだ。これまでの流れの全てが和真の脳裏を過ぎっていく。

特に湯殿での、間の抜けた自分の行動が事細かに、鮮やかに再生されていったなら。

「黙れ、この痴女！」

「なっ!？」

勝手に視られた羞恥と、それを味わう羽目になった理不尽さ。

全身を茹蛸のように真っ赤に染める、様々な激情から和真が叫べば、突然の反撃に雷公姫が言葉を詰まらせた。

まさか自分を宥めようとしていた相手から、いきなり痴女呼ばわりされるとは思っていなかったのだらう。

変に動揺する雷公姫が我を取り戻す前に、和真は畳み掛けるが如

く、堪つていた鬱憤を吐き出した。

「んだよ！？ 否定すんのか、覗き魔が！ 平均より大きい？ 知るか、んなもん！ 何だ？ てめえは大きけりや何でもイイってか？ それなら馬の股座にでも潜り込んで、でけえの啜えていやがれ、このクソアマの色情魔！」

「し、色情……」

「違うつてのか？ お前、さっき言つてたじゃねえか。俺が経験ないつてえのを聞いて、え？ とか何とか。男と見たら、すぐそういう発想に向う、てめえの腐れ外道な考えに俺を当て嵌めんな！ 経験なくて何が悪い？ トランポリン宜しく、騎乗でヒイヒイ喘ぐあばずれよか、遥かにマシだろうが！！」

「とらんぼりん……？ きじょうで……つて！？ わ、私はそんなあばずれでは」

「じゃあ何か、カウガール気取りか？ はいよーシルバー、つてそりや馬か」

自分の言葉をへつと鼻で笑った和真は、「ま、馬並みがお好きならお似合いだな」と雷公姫へ吐き捨てた。

この頃にはもう、彼女の光る拳で殴られても構わないとさえ思い始めていた。

言い過ぎた後悔からではない。

言つてやったという満足感からだ。

言い返す暇もなく、わななく雷公姫の拳ににやにやした笑みまで浮かんでくる。

思えば和真のこれまでの人生、女にはしてやられてばかりだった。夢だろうが現実だろうが、正面きつてここまで言つてやったのは初めてだった。

しかもこんな、在り得ないくらい美人に向つて、だ。

だからこそ、すかつとした胸の内そのままに、同じ背丈の雷公姫を見下す和真。

すると、和真の暴言が余程効いたのか、目を潤ませた雷公姫が言

った。

「……つまり、春告の君は、胸の大きさにはこだわりがないと？」

「あ？……うん、まあ、特にはねえけど」

てつきり何かしらの反論が来ると思っていただけに、肩透かしを食らった和真は、優越感を削がれて普通に返事をした。

何か違うという思いのまま、頭を搔いて眉間に皺を寄せれば更に、「ですが、あの双子に挟まれた時は」

「あーもー、うつせえな！ お前はアレか？ 俺が心底愉しんでたとでも言うのか？ そりゃ、気持ち良くなかったって言ったら嘘になるが……別に望んであなかったわけでもねえし？ アロマとアルエにしたって、惚れ薬のせいでああなっただけ。大体、あの胸のせいで俺は窒息寸前だったんだぞ？ ト라우マになっっていないのが奇跡だろ」

ややうんざりした気分で思い出すのは、胸責めに陥落した意識が、取り戻された後の事。

しっかり着込んで和真を介抱していた双子は、彼の目覚めを知ると同時に、涙ながらに許しを乞うてきた。

自分たちを嫌いにならないで欲しい、と。

正直、和真は女の涙に弱い性質だった。

勿論彼の経験上、弱いというのは庇護欲をくすぐられる意味ではなく、恐怖心を揺さぶられるという意味でだ。

和真にとって、女の涙は文字通りの武器いや凶器、もしくは嵐の前兆。

女の涙に関わる事柄は、多少の無茶でも折れておかないと碌な目に合わない。それが和真の持論であった。

そんな和真の許しを得た途端、手に手を取り合って喜ぶ双子に、涙を回避できた彼は安堵しつつも一言だけ釘を刺していた。

この悪夢が続くとして、と心の中で前置きながら、どうしても湯浴みの世話をしなければいけないなら、今度はしっかり着込んでき

て欲しい、と。

惚れ薬を盛られていたせいだろう、双子は渋々といった調子ながら了承してくれた。

和真はこれで胸責めは回避できたとはっとした。

だというのに、そんな自分が胸にこだわる訳がない、そんな思いで雷公姫を胡乱げに見やれば。

「? どうしたんだ、お前？」

暴言で潤んでいたはずの紫の瞳が、妙に艶かしく煌き揺れていた。怪しいその気配にたじろぎ、和真の足が逃げを開始すべく動きかけたなら、雷公姫が恥かしそうに顔を俯かせた。

まごつく唇の動きに注意した和真が、逃げの体勢を整えた矢先。

「で、では……春告の君は、私の胸が小さくても構わないと？」

「あ、ああ。つーか、お前の胸ってそんな、言うほど小さいか？」

触ってから言うのも難だが、そこそこあるし、丁度良い大きさだと

「

「っ、本当にっ!？」

正直な感想を口にしながらも、よし今だ!と逃げに入ろうとした和真。

だがその前に、雷公姫のいる方から殊更眩い光が届いたなら、そちらをちらりと見て、

「げっ」

絶句した。

「良かった……」

そう発した声は確かに雷公姫のものなのだが。

(ちつとも良くねえ!!)

逃げる足さえなくして、その場に尻餅をついた和真の眼前。

そこには人の形をした電気の塊があり いや、微かにだが、光の先には雷公姫の嬉しそうな表情がちらほら見えていたため、拳に纏っていた光が全身を覆った結果なのは判る。

判るが 判らないのはここから。

（ちょ、ちよつと待て？ 俺はついさっき、あんたを罵倒したはずだよな？ それなのに、何をそんな嬉しそうにして）

十字架の如く広げられた両腕。

近寄る足に、下がる腰は重く。

「待つ」

言えたのは、それだけ。

「小さくても良いんだ！！」

その言葉を合図に、光る雷公姫に抱きつかれた和真は、全身を駆け巡る衝撃に、声にならない悲鳴を上げると、本日何度目かの強制終了を体験するのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8638q/>

少年よ、 を抱け ～ 風木和真の場合 ～

2011年7月10日03時50分発行